英雄史詩

日本男児

作外花玉児

英雄

英雄史詩日本男児

児玉花外作

序

二千五百有餘年、曾て斯の東方の地に無數英雄の活動したりき。今吾は其が埋骨の上に立ち、昂奮靈感自ら禁じがたく、國土尙ほ燃え上る英雄熱に刺戟され、皷舞せられつゝ此を謳へり。

乞ふ少壯よ、老夫も來つて、女も俱に高く歌ひ和せずや。聲は濁るも、光輝國の詩に赤き熱氣含む。

嗚呼英雄の日本よ、劍の日本よ。

明治四十四年十月秋

著者識

目次

日本武尊……一
阪上田村麻呂……一三
平清盛……二五
源爲朝……三七
木曾義仲……四九
源頼朝……六一
源義經……七三
北條時宗……八五
太田道灌……九七

上杉謙信……一〇九
武田信玄……一二一
織田信長……一三三
今川義元……一四五
北條早雲……一五七
豐臣秀吉……一六九
加藤清正……一八一
黑田如水……一九三
眞田幸村……二〇五
木村重成……二一七

蒲生氏郷……二二九
伊達正宗……二四一
山田長政……二五三
近藤重藏……二六五
雲井龍雄……二七七
高杉晋作……二八九
吉田松陰……三〇一
藤田東湖……三一三
橋本左内……三二五
阪本龍馬……三三七

西郷南洲……三四九

日本武尊

極東國あり英雄の
開祖は尊日本武
御顏日の如輝やかに
また美はしく端正に
身長一丈膂力あり
双腕銅の鼎扛ぐ、
景行天皇々子にて

小碓尊幼にして
豪邁の氣は夏雲の
紫の空蔽ふ如し。

景行廿七年八月に
熊襲反けり天皇は
尊に出でゝ征せしむ
小碓此時十六歲、
發すに臨み美濃尾張
善射者を從へて

熊襲に着きぬ十二月
酋長其名取石鹿文
性梟猛に族親と
寒き岩屋に飲宴す。

尊佯はり髮なびけ
藺たき姿童女ぶり
熊襲手を把り同席す
夜闌に沈々と
醉臥覗ひ電光の

尊劒拔き胸を刺す、
血を視酋長呼び曰く
西國武勇我に勝る
今謹みて尊號を
日本武尊奉る。

四十二年に東國の
蝦夷また背く勢強く
誰あり進入り討たず、
天皇尊に勅すらく

形は我子しかはあれ
實は神人朕を天
憐み汝が力にて
統一大業成し得なむ
深謀威德以てせよ、
尊は吉備等隨へぬ。

十月尊京發す
妃弟橘姫軍に在り
伊勢神宮に詣でつゝ

叢雲劍受け玉ひ
駿河國に至りけり、
土賊誑り降り火を
曠野に放つ炎々と
尊即ち寶劍に
草を薙ぎれば火は逆に
賊は燒死す草薙劍。

相模に入りて走水
海を上總に渡る時

風波俄かに荒出でゝ
船は忽ち覆らんず
橘姫は海神の
祟りとなして貴くも
身を海中に沒り給ふ、
浪は平らぎ七日の後
姫が小櫛は磯濱に
漂ひ着きぬ哀れにも。

尊上總を玉の浦

蝦夷が境に船を行る
時に研ぎたる大鏡
船に掛けたる海上は
晝にも月の照る如し、
賊酋島津國津等は
神人來ると怖れつつ
尊の名問ひ降りけり
威武海陸を壓しつゝ
蝦夷悉く服しけり。

信濃越の國遠くして
未だ王化に從はず
尊甲斐より北を取り
武藏上野立歷り
西碓氷なる峠にて
東南の海の方
橘姫を追慕しつ
吾妻はやと歎き玉ふ、
雲憂はしく日は薄く
鳥は吾妻の空迷ふ。

尊信濃の險に入る
山深くして鹿の跡
毒氣瘴霧の立籠めて
草笹分けつ踏破り
遂に美濃より尾張路に
宮簀姫許留まりぬ、
膽吹の山に惡神の
在りと尊は草薙の
劍を姫が家に置き

其を除かむと登る山。
怪風雹を交へつゝ
大蛇の毒に當り醉ひ
身體痛みて野褒野なる
綠野に伏し家の方
大和を偲び歌ひつゝ、
宮簀姫が床に置きし
劍を思ひ堪へがたく
其太刀はや劍の太刀

高く歌ひて日本武
英雄の尊は薨じ給ふ。

坂上田村麻呂

桓武天皇即位して
都を山城平安の
山河清さに定め給ふ
緑瓦朱柱の大極殿
恐れて鬼も魔も寄らじ、
東北蝦夷の鎮らず
延暦三年春二月

大伴家持任ずるに
征夷將軍、多治比宇美
陸奥按察使副將軍。

六年七月精鋭の
東海東山の軍閲し
糧食夥多天さがる
北多賀城に運ばしめ、
駒を久しく青草の
野に養ひて勇武なる

阪東諸國の步騎兵と
二千餘人を發しつゝ、
來春三月雲の如
多賀城の地に來會す。

紀古佐美征夷大將軍
八年三月諸軍士の
雪は鵞毛と降しきる
寒き多賀城に集合し
道を分つて賊を討つ、

戰衣徒らに朽果て、
衆衣川に屯して
進まず糧食又空し
朝廷軍の罪を議し
兵馬蕭々返しけり。

年々歳々師を出し
蝦夷を討てども猖獗に
勳功を樹つる將あらず
十二年征夷大使には

大伴の弟麻呂副使には
巨勢野足に一人は
坂上の田村麻呂豪傑に
糧を蓄へ大擧して
群がる蝦夷の軍を擊ち
數々捷を京に致す。

十五年春田村麻呂
陸奥按察使陸奥守
二十年には累進し

征夷大將軍に任じけり、
將軍蝦夷を大破して
閉伊に至りて獰猛の
其巢窟を衝き盡し
翌膽澤城を築きつゝ
東國浮浪を移居り
米鹽越佐が海による

時に將軍の風望み
夷首大墓の阿氏利爲に

盤具の母禮族五千人
刀槍伏せつ來り降る、
七月夏に田村麻呂
二酋率ゐて凱旋す
京都の衢に大宮人
長き袖して少女等も
夷の異裝珍らしく
老若男女打ち集ふ。

蝦夷は概ね平定し

二十二年に田村麻呂
志波城築き阪東の
糧をば移す中山柵
とすれば急に矛に起つ
蝦夷に備へぬ、年五月
膽澤城との中間に
一驛設け秋田城
廢して秋田の郡を置く
鎮夷將軍の力なり。

坂上の出は阿智使主に
世々武を以て鳴りにけり
父苅田麻呂氷川なる
事に座せしが官職を
奪はれ後に赦されぬ、
田村麻呂六尺重さ二百斤
顏は赭色眼は蒼隼
髯鬚金線の如くにて
怒れば猛獸慴伏し
笑へば稚子も親みぬ。

延暦二十四年參議より
正三位なる兵部卿
後嵯峨天皇の御朝に
藥子が亂に勅を受け
三關固めて功あり
遽に大納言に進めらる、
弘仁二年薨じけり
京人泣て皆惜しむ
朝廷墓處を山城の

宇治の栗栖に地を賜ふ。
豪骨香ばし屍を
棺中に立て懷かしき
平安京に向はしめ
佩劍帶びて葬りぬ
國家に事變ある毎に
巨大なる墓鳴動す、
後に大將出征の
度に詣で丶勝祈る

今も京都の東山
翠緑に殘る將軍塚

平清盛

夏の八月炎天に
入道雲の起るみば
そは清盛が英姿なれ、
當時海内第一の
飛鳥墜ちし勢や
平家の族のいと赤き
その火の如き傑雄よ、

個人の權威はた力
美的生活を振舞ひし
武人を兼ぬる爲政家や。

祇園神社の油僧
銀紙の刀に知られたる
平忠盛の七人の
嫡男にとぞ產れける、
唐皮の鎧、小烏の
太刀を讓らる目出度さよ、

阿闍梨修業、貴狐天王
奇瑞現はる貴公子は
清水觀音に詣でゝは
他日の出生を誓ひける。

海波ゆら〳〵美くしき
安藝守にて清盛は
保元の亂に賴長や
源爲義を破りけり、
たゞ爲朝の大箭に

驚かされし笑止さよ。
あゝ法皇の白河殿
火に落ちしこそ悲しけ、
腐儒の愚策は昔より
天下過まる史の上や。

平治元年信頼を
討ちて旭日の昇る如
参議、検非違使、中納言
權大納言に踏みのぼる

人間の運天に勝ち
仁安元年内大臣
太政大臣兼ねにける、
彼れ大將に非ざるも
黄金飾りし輦車には
兵仗隨がへ宮中へ。

豪放ゆふべ病して
五十一にて入道し
法名淨海と改めぬ、

外戚父の官職に
子孫さながら花の如
光る霞の満つる如
六波羅一家の公達や、
男も女も法印も
平氏に非ねば人で無し
六波羅様とぞ怖れけり。

京洛中に何事ぞ
切髪の童子三百人

赤袴着て歩みつゝ
黒き瞳に物色す。
攝政關白基房の
牛車をば無禮にも
若き資盛遮ぎりぬ、
今一門は幸多く
重盛知盛維盛や
娘八人麗はしき。

物の哀れは不平家の

瓶仆れしも倒されず
西光法師成經と
鬼界ヶ島に俊寛を
流すもまして、貴くも
崇德院をば讃岐なる
月にかけさす泪かな、
白峯の御墓草しげく
詩人西行が血涙の
一首の歌に弔へり。

平家にひとり有情の
小松内府はいたましく
四十三にて身まかりぬ、
こゝ東山將軍塚
大地震して鳴動す
見よ驕りたる惡運の
今は盡きぞと人は噂ふ、
福原の南島を築き
清盛美術に意あり
嚴島の宮造營や。

祇園精舍の朝の鐘、
京の邊りの白拍子
祇王に祇女の袖の露
濡れける間に治承四年
東方に翻る白旗は
頼朝伊豆に、木曾冠者
源氏譜代の强者は
雲の如くに起りたり、
入道の怒り殿噪ぎ

宗盛萬騎追討す。
頼朝の頭我が墓に
掛けねば兒孫汝等よ
堂塔供養清盛に
何の要かと喚叫びつゝ
阿鼻焦熱の大地獄
七日七夜に悶死しぬ。
暴逆の果一塊の
京師の土に殘りしも

あゝ火の如き熱英雄
焔の終りぞ美はしき

源爲朝

極東秀づ武の國の
絶世無比の痛快兒
弓矢の雄よ自由の子
西九州に琉球に
風雲波濤捲起し
鎭西八郎爲朝は
天眞爛漫自然兒の

勇武の儘の振舞に
活氣躍々欝勃し
劍戟の空蔽ひけり。

藤氏榮華の夢さめて
凋落の秋今ちかく
皇權挽回の途もなく
平俗淫弱墮する時
爲朝の弓は現はれぬ、
八郎長じて氣豪なり

器量力量人に越え
左手の肘は四寸延び
諸兄凌辱十三に
父爲義に追はれたり。

自由飈行豊後入
阿蘇忠國の女と婚し
鎮西八郎爲朝は
菊池原田が諸豪族
戰ひ勝ちて弓の矜

自ら任ず九州の
總追捕使と稱しけり、
勢ひ旭日西に照り
十五四方を征伏し
筑紫九州を從へぬ。

爲朝九州に覇六年
京の宣旨に爲義が
我れ故免官悲しむで
都に歸れば雲急に

保元の亂の幕は開く、
是れ八郎が若うして
一世一代活劇に
史上の花と百世に
其の武者振を歌はるゝ
火花飛散る大快戰。

あゝ保元役君臣の
骨肉權威爭へる
血は斑々と腥さき、

後白河天皇に忠通と
源義朝清盛と
崇德上皇頼長や
源爲義六子あり
爲朝當年十八歳
身丈七尺堂々と
上皇軍の重鎮に。

頼長諸將策謀る
爲朝進み答ふらく

大戰二十小戰二百
臣西國に試むに
必勝夜攻に如くはなし、
義朝一矢清盛輩
鎧袖觸れば斃れなむ、
頼長聽かず退きて
爲朝大に罵りぬ
長袖焉ぞ兵を知らん。

保元六年七月夜

義朝清盛數千人
白川殿に襲ひ攻む、
賴長聞いて爲朝を
遽に拜す藏人と
我は之れ鎭西八郎
唯可なりとて受引かず
官職何ぞ英雄に
危急の場合用かある、
爲義等守る西門を。

爲朝此日紺の地に
獅子の模樣の直垂に
八龍唐綾の鎧着て
二十六黑羽の矢を負ひ
七尺五寸の强弓に
郎等と共に奮戰す、
一箭清盛走らせつ
二鳴義朝驚かせ
武勇揚れど西の風
火あり運命白河殿

敵の放火に炎々と
白河殿は陥落し
父爲義は斬られつゝ
八郎肘の筋抜きて
伊豆大島に流されぬ、
海潮廣し蒼々と
男兒に配流悲まむ
豆南諸島を手の下に
三宅八丈渡り統べ

波上帝王の業成せり。
十年雄心濤を湧き
南琉球に押渡り
民を撫順し子を設け
復大島に還りけり、
嘉應二年平船を
最後一箭鳴鏑に
沈めて自殺三十二
嗚呼、爲朝が弓矢こそ

詩人バイロンが筆の如
海天晃る弓張月。

木曾義仲

嗚呼一萬五百七尺
御嶽山と面合せ
九千五百四尺駒ケ嶽
四季翠緑なる深林の
廣袤三十五萬町、
男心のいと白き
花崗の岩のそが間を

氷珠飛ぶ激湍の
豁流凡そ二十二里
天下に木曾の谷といふ。

英雄起る昔より
地形は好しや木曾の山、
草鞋穿ちて旅人の
足蹈み入れば美はしき
春紫の藤の花
躑躅は岩に紅ゐに

血汐の如く染むるなり、
夏の氣薄く冷やかに
劍のごとく光りつゝ
霧立ち山を包むかな。

旭將軍義仲は
木曾の御山の產む男兒
今なほ山は日に風に
豪雄の名を水も呼ぶ、
人間何ぞ逆境の

賜物ならぬ木曾冠者
義仲幼に父討たれ
駒王丸は兼遠や
齋藤別當實盛の
情ある手に養はる。

其名可憐や駒王丸
六條判官爲義が
孫義賢の次男にて
父は源太の義平に

討たれし時は呱々二才、
信濃國は安曇郡
木曾の山里朝夕に
馬を險峻に乘習ひ
弓矢と劍を深山の
森と風とに學びけり。

源氏の代よか自らの
野心に猛き駒王丸
時に京師に忍行き

平家の様を覗ひき、
木曾の果機は熟し
二十餘年の曉に
高倉宮の令旨受け
旭將軍と名宣りつゝ
國中千餘騎從へて
白き雲蹴り駈出でぬ。

壽永二年の春四月
平家は維盛大將に

十萬の兵來り攻む、
義仲聞いて越中に
乳母子今井兼平と
迎へて平氏火にかけて
倶理伽羅谷に一萬を
木の葉の如く埋めたり、
法皇行家義仲を
賞され義仲左馬頭。

元暦元年從五位下に

征夷將軍は柔弱の
平家を逐ひて洛に入る、
木曾の山猿の癖ありて
衣冠禮儀を蠻勇の
頻りに亂暴狼藉に
京人懼れ目を見張る、
時に賴朝義經に
木曾赦さずと宇治に攻む、
朝日將軍色あらず。

七八條の磧より
霞となびく白旗に
三條指して十三騎
哀れ義仲落ち行けり、
義仲の妾巴あり
馬背甲を脱ぎ去りて
腕に長刀月の如く
丈に餘れる黑髪は
漆の瀧と麗はしく
七騎の内に隨ひぬ。

女丈夫巴が容色は
敗軍最後の彩なれや、
げに運命の盡く處
近江國の粟津原
赤地錦の直垂に
薄金の冑義仲は
甲の額を矢に射られ
果敢なく殪る落馬して、
東殿原見はやとて
兼平太刀を喞へ死す。

江東の子弟八千の
項羽は烏江に亡びたり
彼に虞美人此に巴
古今情あり涙あり
英雄を飾る花なれや、
山中の孤兒京師にて
將軍の名に瞑すべし
『木曾の御嶽夏でも寒い』

精悍不敵義仲を
偲べば覺ゆ寒さかな

源頼朝

源氏白旗雲流る
相模國は鎌倉の
空紫の小天地
源家の覇業開きたる
昔懐かしき處かな、
初夏の五月は新緑に
鎌倉山のほとゝぎす

男の嗜む初鰹
雪の白浪香も勁く
先づ頼朝の面影や。

弓矢の神の大菩薩
天下を握る霊現の
八幡神を勸賞す
鶴ヶ岡の前行めば
眞白き鳩の多く舞ふ、

歳に錆びしも燦爛と
みな頼朝の殘したる
強き意力は黄金の
鎌倉の中照すかな。

平治の戰破れては
父義朝は尾張にて
刃に刺され、義平は
四條磧に斬られたり
次兄朝長傷に死し、

この時頼朝十三の
頬紅ゐの一少年
母の常磐に牛若と
雪の上をば彷徨ひぬ
これ艱難の首途にて。

伊豆に捕はれ流されて
蛭ヶ小島に二十年
枕も夜々に濡れけらし、

赤き腸千々に斷つ、
時に怪僧文覺は
熱辨叛を說き進む
右手に携ふ一塊は
故左馬殿の髑髏
無念は骨に靑悽く

げにや煙の揚がる如
治承四年に勇ましく
蛭ヶ島より白旗の

潮の風に棚びきぬ、
父祖重恩の徒輩は
武藏相模や伊豆駿河
劍槍鳴らし馬を曳き
秋到れりと集まりぬ、
相模の住人景親や
武藏重忠の武者振や

石橋山の一戰に
運拙くて敗れしも

臥木の虛ろに隱れつゝ
また現はれて軍備しぬ、
平氏の大軍押寄せて
淸見ヶ關に陣取れど
パッと群立つ富士川の
蘆は動きて水禽に
維盛の軍は潰れけり、
無膓公達の可笑さよ。

浮島ヶ原陣の前

顔いと白き小男は
久しく會はぬ弟の
誰かと訊へば御曹子
相見て俱に涙しぬ、
亡父の恨を晴したく
兄に力を援けむと
奥州かけて馳せ參ず
是より勢ひ破竹にて
平家は京に色褪めぬ。

同じ清和の血を引きし
木曾の將軍義仲を
粟津に殪す矢の嵐、
嘆かしきかな西海に
平家を討ちし源九郎
讒者の言に鎌倉の
關には入れで追遣りぬ
陸奥の果なる衣川
義經殺す殘忍や
範頼もまた罪なくて。

諸國海内平定し
股肱の群臣星の如
今ま鎌倉に月か日や
天下を取れる大將軍
北條政子の女豪傑
鶴ケ宮側公孫樹
實朝卿の流血に
源氏三代に滅ぶとも
蛭ケ小島に忍びつゝ

六十餘州を握る權。
近江と美濃の間にて
父に後れて駒の上
うら〳〵睡る大膽さ
馬より土兵打斫りし
少年は我が賴朝公、
頭大音吐人壓し
狩場巨鹿捉ふ腕に
天下統べたる政治家よ、

霸業の蹟の鎌倉や
由井ケ濱波謳歌せり

源義經

我が日の本の紅顏に
牛若丸と唄はるゝ
炎のごとく花の如
詩人の熱き血潮ある
多恨多情の英雄よ、
踏み往く路は天才の
閃めき軍馬に放ちしも

轗軻不遇に薄命の
涙と血との斑々を
青史の上に留めたり。

父義朝を喪ふや
母の常磐の手をはなれ
京の北山鞍馬にて
幼き月日過せしが
金賣吉次に連れられて
陸奥の國へは下りけり、

天狗棲むてふ鞍馬山
冬は雪降る松の上
寒さ嚴しき鋭さを
秀才質に注ぎけり。

戰國の世の美しき夢
古き都のローマンス
五條の橋に何物ぞ
千人斬の名に高き
夜な〳〵出づる怪僧を

月の明りに打伏せぬ、
擬寶珠長刀小太刀はも
南方的の溫かき
藝術國の少年に
懷かしき一つ幻繪。

頼朝兵を擧ぐる聞き
齡廿の若武者が
廿餘騎をば從へて
浮島原に着く曉、

兄頼朝の命に依り
蒲の冠者の範頼と
旭將軍追擊す、
義仲時に洛に在り
義經萬騎伊勢路より
黄金の太刀を輝かせ。

平氏は少し勝誇り
南海の兵十萬に
讃岐屋島を出發ちて

一の谷へと陣取りぬ、
東生田の森深く
北は屏風を立つ如く
南は海に兵船の
陸に赤旗春風に
花か猛火の燃ゆごとし、
鵯越に夜襲かな。

新帝位に即き給ひ
治暦四年に義經は

九郎判官從五位下に
檢非違使の役進めらる、
元暦平家追討に
西は鬼界ヶ島までも
新羅百濟やはた高麗も
赤旗の影無くすまて
源氏の船は堂々と
白旗なびけ船出せり。

梶原景時何奴ぞ

浪に逆艪の爭ひや、
猪よけれ虎よけれ
眞の勇者の爲す前に
我を妨ぐ荒海ぞ
三日航路を三時間
阿波の浦にぞ往着きぬ、
嗚呼ハンニバル、ナポレオン
世の天才の熱烈に
鵯越や屋島の險。

西の夕陽の麗はしく
茜の色に映ろひて
沈む平家の末路哀し、
赤旗赤符海の上
波も血汐に變りつゝ
昨日の榮華夢の間に
紅き藻屑と消えにけり、
あゝ壇の浦砂に這ふ
平家蟹見て一曲の
哀歌を寄する詩人はも。

腰越の驛去りてより
廣き天下に五尺の身
容るに由なく吉野山
櫻の花の英雄の
艶史をかざる白拍子、
しづや靜は立舞ひて
鎌倉武士の膽と氣を
奪ひて矜る豫州の妾、
文治三年義經は

陸奥に免れて泰衡へ
蝦夷に入りしや知らねども、
兵略上の天才は
瞬く平氏滅せしが
薄命終に衣川
火をば放ちて自殺しぬ、
首級は容るゝに漆櫃
美酒に浸して悲しくも
鎌倉右府へ送られぬ

花の盛りの三十一
見る者袖を濕ほしぬ

北條時宗

武士は鎌倉ほとゝぎす
青葉は香り鮮かに
掌に似る一小地
覇業をこゝに成すに足り
此處に天下を定むべし、
頼朝興り北條の
幕府の基は開きたり

日蓮こゝに獅子吼して
法華經の德雄辨に
波濤の如く光布しぬ。

相模國と名に呼ぶも
由井ヶ濱べに古の
浪も應へて鳴千鳥
げに心地よく響くかな、
源九郎と憂き白拍子

平家の侍景清の
忠義に凝りし一念は
赤き涙をこゝに見せ、
瓦いさごも詩の匂。

雲はしきりに搖曳す
白旗山や源氏山
綠と射照る廬舍那佛
美と壯嚴の大佛は
武家信仰を偲ばしめ、

寺に撞くなる鐘の音は
鎌倉中に響きつゝ
歴史の繪巻英雄の
結びし夢を浮ばしめ
情緒感慨盡くるなし。

相模太郎時宗は
此地に在りて痛快の
破天荒なる壯擧をば
弘安四年に仕遂げたり、

鎌倉豆に似たりとも
豪傑の膽斗の如く
こゝに果斷し勇決し
大元呑みて夏の晝
國家の難を一髪の
危急の間にさばきたり。

熱血男兒時宗は
建長三年夏五月
最妙寺殿時頼の

嫡子幼より聰明に
十一既に射を善くし
馬上衆目驚かす、
十三從五位下左馬頭
外戚泰盛補翼して
後時宗は執權に
庶兄時輔叛し刺す。

千里の沙漠都せし
蒙古鐵木眞成吉思汗

其血を傳へ獰猛の
元主忽必烈金宋を
滅ぼし東亞歐を嚙み、
勢ひ虎の威に乘じ
宇内統一を企てゝ
眼中あらず日本國
先づ韓人に書を齎し
我が鎌倉を虚嚇せり。

外敵未だ馴れざりし

朝野こぞりて震駭す
時宗一人不可として
書を斥けば使節來る
使節來れば夏寒き
龍の口にて之を斬る、
復も至らぬ筑前の
凄き博多に斬棄てぬ、
明春兵艦修理して
蒙古の罪を討たんとす。

是より前に元の兵
弘長十一年一萬に
對馬を侵し猖獗に
地頭宗助國は
戰ひ死すや壹岐に入る、
元兵狼藉極みなし
島の婦の優柔くて
髪は海藻のいと長き
少女醜夷に捉へられ
諸民景隆討死す。

大和男子が血祭の
血をば見せたる振舞に
弘安四年夏七月
元主忽必烈虎髯を
立てゝ大に怒りつゝ
舟師十萬來り襲ふ、
舳艫旌旗は空を蔽ひ
海を壓すれ勇敢の
河野通有艦に躍り

將を擒し兵を斬る
忽倏天の一方に
颶風起れり暗澹と
元寇十萬海荒れて
戰艦覆へり瀾の間に
木の葉の如く漂ひて
生者僅に三人のみ
嗚呼弘安の四年なり
執權北條時宗よ

膽は大なり決斷の
相模太郎を讃ふ哉

太田道灌

やまと少女の山吹の
詠にて名をば歌はれし
太田道灌資持は
譬へば紅葉燃ゆ如き
意氣熱烈の英雄漢
山吹の花に誤まらる
文弱の士に非らずかし、

四百年前江戸城を
廣き武藏野に築きたる
江戸を開きし勇夫なり。

幼名鶴千代神童の
十一歳に詩歌善くし
障子屏風の爭論に
父をやぶりぬ父曰く
矯れる者は久しからず
鶴千代直に答ふらく

不驕亦不久
父は怒りて面を撲つ、
九歳鎌倉建長寺
經史を修む七星霜。

げに關東の雄鎮に
要害堅牢日に映ゆる
江戸城昔し武藏野に
千代田を擇び築かれぬ
故に世に呼ぶ千代田城、

こゝに據れるは政策に
地利關東に雄飛して
天下に覇をば稱ふべし
道灌が眼は高うして
智は永久に輝やけり。

初め道灌京洛の
將軍義政の許し得て
康正二年起工しつ
元祿元年竣成す

資持時に二十五、
城墻三部に別たれて
壘壁高く數十丈
由つて軍隊訓練し
其名軍法師範たり
著あり道灌雄飛錄

後三州に德川の
移り泰平三百年、
道灌常に此に住む

春は筑波に霞罩め
秋は七草武藏野の
露啼く虫を月に聽き
西に秩父の連山や
南は波の品川や
關東景色一眸に
高きに登り眺むべし。

廣き城中亭や間や
燕居の室に靜勝軒

杜子美が詩句に因みたる
その名淸しき含雪樓、
望めば秀麗芙蓉峰
白雲纏ふ姿かな
詩賦は絕妙いと多し、
道灌江戸の城の外
川越城を築きたり
詩餘經濟に熟達す。

文才加ふ勇將の器

扇ケ谷上杉の
爲めに山内撃破り
小机松山城陷し
戰爭重ぬ數十回
關八州に恐れらる、
衆寡敵せぬ曉は
自ら作る進軍歌
騎馬に歌ひて急先鋒
孫吳に通じ士を用ふ。

英雄風流閑地あり
陣中和歌を詠じつゝ
至誠世に處し道悟る
大難雷と落來るも
神色毎に自若たり、
多年上杉定正の
爲めに顯定敵としつ
內外事を謀りしが
定正暗愚猜疑して
義士道灌を殺しけり。

敵の間者に乗ぜられ
相模糟谷の荘に招き
刺客襲ひ浴場に
哀れ英傑斃れたり
文明十八年七月秋
資持時に五十五、
不意に閃めく兇賊の
剣と血潮流る見て
静かに辭世の歌誦へ

平然として瞑目す。
歌書史傳冊千餘函
平素好賦す十一集
花月百集平安紀行
皆な千載に傳ふべし
道灌千代田トす時
専ら義勇尊重し
自治の制裁固うしぬ
是れ武藏野に江戸兒の

月日に榮え仁俠の
紅綠今に江戸氣質。

上杉謙信

空は沈みて暗うして
雪は眞白き越路かな
激浪巖嚙む日本海
秋の末なる能州の
吾れ漂泊の旅すがた、
七尾の街を切る如き
月と斜めの雁影に

風流詩的英雄の
不識庵をば偲びつゝ
銀光の天仰ぎたり。

佐渡ヶ島かけ北越の
山より寒く吹く風は
天正の代に謙信が
錦の厚き陣羽織
鎧の袖を颯々と
吹きし風かも懐かしゝ

紅ゐおぶる吾頰に
劒のごとく當りつゝ
若く緑の長髪を
蓬が糸にそよがする。

享祿三年正月に
毘沙門天の御告あり
母の產家に異形なる
神人守護す幻に、
初湯の時に深閨に

明星電の如くにて
閃めき入りぬ湯盥へ、
今戰國の亂れ世に
一劒抽いて鎭むべき
英雄の兒は生れたり。

幼名虎千代七歳に
竹の子笠に雨凌ぎ
闇夜に城を拔出でゝ
賊の首級をば拾ひゝ

蔦蔓にて引き歸る、
父は畏忌れて僧とせば
菩提寺なる門前に
童子を集め大將と、
故郷逐はれば山上に
國内睨む眼中に。

謙信の勇超凡の、
蛇は寸にして人を呑む、
父爲景は討死し

兄晴景は生害す、
茲に謙信國を統べ
村上義清義に扶け
甲斐に此頃雄視する
武田信玄と戰ひぬ
之より風雨十五年
甲斐と越後に暇あらず
我も其秋在りもせば
長劍入りて試むを、

東に北條織田今川
西に大内龍造寺
尼子大友島津等の
英雄四方に蜂起して
雲の如くに騷ぎつゝ
麻の如くに紊れたり、
甲斐と越後の山の如
唯兩雄は群を拔く。

吁川中島こたびこそ

雌雄を決す戰や
謙信鼓を打ち笑語しつ
信玄北の雛僧厮と、
永祿四年秋の末
信玄二萬謙信は
一萬三千犀川の
かなたの霧に旗なびく、
龍虎まみゆる數刻に
信濃の空もたゞならず。

忽ち將あり旗本に
月毛の馬に跨りつ
金の兜の緒を切りて
白練の絹に鉢卷し
三尺六寸の大太刀に
豎子何處ぞと斬付る、
信玄刀を拔きあへず
軍配扇に止めしかど
二つに折れて肩先へ
恨み殘して別れたり。

兵畧勇は源九郎
慓悍無比に風流の
春日山なる不識庵
上洛織田を討たんとて
天正六年春寒く
手足痺れてまた起たず、
信玄の死を聞きし時
箸を投げたる梟雄は
流星の如殞ちにけり

光芒いまも北の空。

一代四十九謙信の
烈しき覇氣と熱情に
越の白雪湯のごとく
英氣四方に溢れしよ、
戰場鐵の小笠着て
竹端採つて指揮すれば
馬前の一軍みな躍る、
敵に鹽をば送りたる

義血俠血の眞男兒
長空高く歌はゞや。

武田信玄

山飛び越ゆる白雲を
峽中の地に望む時
隊伍整へて肅々と
武田の勢が國出づる
その軍形の浮ぶかな、
風吹き來り颼兀と
雲もさま〳〵に變る時

孫呉の奥を極めたる
機山の略を念はるゝ、
秋はことさら渡り鳥

雄大にして山體の
尖り峻しき姿こそ
これ信玄の氣宇にして
その欝勃の野心なれ、
此處に信虎の嫡子にて
勝千代丸と呼ばれたり

誕生の日に白雲の
白旗のごと條引きて
産家の上に白鷹の
三日去らざる奇蹟あり。

容貌秀て異なりて
猥りに啼かず泣ば聲
人の耳をば貫けり
書は天性に一聞いて
忘れず智慧に驚かす、

九歳の時に近臣と
雲雀の巣とり野に出でぬ
侍臣は一も獲ざる間に
廿を取りぬ勝千代は
名を後の日に揚雲雀。

十三荒馬乗廻し
その戰國の常として
父信虎に忌まれしが、

十六勝頼元服し

父をば逐ひて甲斐國
之より獨歩峡中に
見よ風雲を呼起す、
吾れ一歳を留まりて
富士と機山の墓の前
若き血潮の湧きにしよ。

天文年中京都より
美女三十を集めつゝ
奢侈歡興の日は深し、

一たび覺めて菲崎に
板垣信形と合戰に
時瘧病みて褥にあり
遽にたちて湯漬飯
馬の用意よ鎧よと
兒徒が首を提ぐべしと
左右愕き色あらず。

信濃の境を掠めつゝ
氏康義元に依らしひる、

天文十九年天道を
恐れて信玄剃髮し
信の小笠原長時を
桔梗ヶ原に破りては
一千五百首斬りて
唐紅に野を染めぬ、
木曾左馬頭を擊降し
四方の敵に怖れらる。

永祿四年秋九月

上杉謙信は一萬餘
姨捨山の東なる
川中島の廣原に
折掛の纏朝風に
旌旗槍刀篠を突き
車掛りの陣を布く、
信玄見やり感嘆し
その陣形を變じたり、
川中島に創を得ぬ。

四男勝頼を鍾愛し
陣中に繙く古今集
風流和歌を嗜めり、
北條氏康を攻めし時
八幡大菩薩の大旆を
津波に流し北條の
卒に拾はれ一笑し
甲斐と信濃に上野の
兵に氏康破りつゝ
豆駿諸城を拔きにけり。

信玄京より佛匠を
召して木像作らしむ、
今日本に武を競ふ
北條上杉はた織田の
居城に近く亂入し
城下を燒けど信玄が
城は一たび侵されず、
我は死すとも不動ぞと
像の頭を黑く染め

火炎と劒を持たしめぬ。
川中島以來知られたる
風林火山孫子の句
天上天下唯我獨尊
しるせし旗を押立てゝ
織田を討たんと出發つ日、
四海一統成らずして
病に仆る喪を秘して
死體は諏訪に沈めらる

攻城野戰の大才は
冷えて眠れり五十三。

織田信長

嗚呼火の如き性情の
火にて亡ぶる大丈夫の
何か憾みぞ華やかさ、
渾身猛き武と勇の
凝りて輝やく英雄よ、
その滿腔に蟠まる
粗暴の活氣發しては

嵐となりて荒狂ひ
狂ひし果は火を呼びて
紅ゐの裡に消えにけり。

織田上總介信長は
尾州清洲の城主なる
織田信秀の嫡子にて
匂ふ童名吉法師
天文三年呱々として
火性男兒は曉に

大名の家に時告ぐる
鷄の聲共産れたり、
十三晴れて元服し
翌三州へ出馬しぬ。

天資聰明鋭どくも
若く烈しき熱情の
放縱常に度を越せり、
裝束髪も異樣にて
馬上城下を横行し

果物を手任せ摑喫ふ、
人笑へども平然と
民百姓等目を見はり
織田の若君亂心と
家臣も憂ふ狂公子。

父信秀の死せし時
信長あへて悲まず
服整へず起ち進み
靈前に投ぐ線香屑、

美濃の齋藤龍興の
娘娶りて會見に
家臣を擧り堂々と
三間柄長の槍持せ
行列總て赤好み
舅の膽を奪ひたり。

奸雄充つる戰國は
四隣の敵に信長が
弱味を見せぬ智畧なれ、

愈よ茲に今川と
桶狭間にて戰ふや
生絹の帷子一重着て
人間僅か五十年
夢まぼろしと立て舞ふ
海道一の大軍を
前に控へて別杯や

熱田の宮の方にして
俄に黒雲風吹きて

砂礫を飛ばし稲妻の
晝常闇にことならず、
あゝ桶狭間義元に
夏一炊の夢なれや
織田小勢の不意撃に
豪氣油斷に滅びけり
屏風引廻し毛氈の
酒宴の場は血の海と。

英雄多感義元の

首級に涙を灑ぎつゝ、
永祿四年秋初め
上洛將軍に拜謁す
君に知られし光秀は
軍學鐵砲の妙術に
諸侯を說けど容れられず
藝州去りて硫黃灘
土佐阿波紀伊や漂泊し、
梟雄遂に主を害す。

威勢旭日と昇る蔭
猿面郎の牙籌あり、
勢州江州一揆討ち
將軍義昭と和親しつ
荒木村重に劒饅頭、
齋藤淺井朝倉や
三好松永自害しつ
中國四國平定し、
天正十年勝頼を
長篠の役に亡ぼしぬ。

北條武田上杉等
豪雄四方に凋落し
天下漸く寂寥さを
狼火は揚りぬ本能寺、
丹波を出でし光秀が
桔梗の紋は渦と卷く、
すは逆賊か御參なれ
白綾の單衣丸帶に
大箭把つて信長が

寢殿に立つ月暗し。
紅顏蘭丸ありとても
頽勢つひに運命の
安田作兵衛が投槍に
障子にサッと血の煙
殘燈の光大刀走り
猛火の中に消え玉ふ、
恨みは長し本能寺
四十九にして滅びしも

青史の上に英雄の
殘る焔ぞ美はしき。

今川義元

たちまち黑雲また嵐
電光閃々盆の雨
自然も荒るゝそが中に
天下に誇る英雄の
男兒互にまみえたる
桶狹間なる活闘や、
事須らく急速に

勝敗の外華々しく
刹那に來り劍光の
刹那に滅ぶ面白さ。

昨日は海道の城に據り
兵十萬の大將の
けふは慘たり桶狹間
豪雄の覇業松の露
青き草よりはかなけれ、
眼中人なく我もなく

勇氣のまゝに振舞ひて
運命の前に殪れたる
悲劇的なる義元の
あはれ桶狹間活劇よ。

人間永劫に戰場よ
意氣に立つ子の其が上に
雨あれ風あれ石も降れ
逆害何ぞ甘んじて
己が氣力を試みむ、

粗豪過つて倒るゝも
男兒に何か悔あらん
海飜へる暴風雨
天を恐れぬ今川と
機を捉へたる信長と。

悲劇英雄義元は
今川氏輝が弟の
天文五年十八歳、
瀬戸名に高き禪德寺。

默堂和尚の弟子にして
今川五郎義元と
家名を嗣ぐや駿河城
優雅育ちの公達の
自ら勵み武を備へ
威を東海に振ひけり。

相摸の國の隼の
北條氏康兵四萬
駿河國に亂入し

軍を富士川の東なる
原に朝日に輝かす、
義元二萬五千餘騎
川の西岸陣せしが
義元利あり簇蘆の
上に白旗なびけつゝ
駿城差して歸りけり

今川治部大輔義元は
東海の強き兵率ゐ

天下の亂を切鎭め
京都に上洛將軍を
補佐し蔓る奸賊の
三好松永狼藉を
平らぐ日夜の志、
北條武田と緣結び、
上杉甲斐を覗へば
豆相の東に敵はなし

初め義元家康を

人質として在りけるが、
後家康は駿の爲
小き諸城を降せしが
義元大によろこびて
さば來ん春は出馬して
尾張平げ美濃徇へ
淺井と共に上洛し
天下管領の權握り
駿遠の威武を揚ぐべしと。

四邊怖るゝ者はなく
永祿三年夏五月
杜鵑血に啼くさみだれの
二日に軍馬肅々と
義元駿府を出立ちぬ、
二城を燒きて桶狹間
部署定まりぬ四萬人
織田何すぞと呑む慨の
將は眉昂げ大杯に
明日の勝利を祝ひけり。

運命狹し桶狹間
兩軍知らず刻の間に
驚天動地血は流る、
砦を出たる三千の
尾張の兵は裏山の
蔭を傳ひて潛やかに
田樂ケ窪へ陣取りぬ
空は愈よ暗澹と
鳥も鳴なく眞晝時

呎尺を更にわきまへず。
暴風颯と一吹きに
あゝ運命は變轉す、
尾兵が不意の驀進に
赫と怒りて猛將は
腰なる左文字大刀を
拔きしも哀れ血の泉
松の根方の草染めぬ。
吾れ桶狹間汽車の窓

悲劇的なる英雄を
吊して袖を濕ほしぬ。

北條早雲

その迅きこと雲の如く
その來れるは風の如し
伊豆と相模の險に據り
威を關東に振ひたる
鞘を脱して晃々の
劍に似たる英雄よ、
氏も育ちも助なく

只自らの力にて
關八州の王たりし
鬼神のごとき梟雄よ。

伊豆の山々箱根山
四時のみどりは男性の
色をば帶べり濃紫
此處の氣清く爽やかに
天外聳ゆ富士の山、
男兒ねころび枕して

鬱勃の情なからんや
山に猪あり兎あり
夏の湖鱒をどる
快傑四方の志。

丈夫身を置き一世の
覇を遂ぐるべく潔よき
地形を擇べ須らく
伊豆に城せば山の翠、
雄松雲呼ぶ小田原に

城せば高き天守閣
波の寄る見ゆ相模灘
英雄廣き胸にして
若き血潮の湧かざらん
白帆野心を乘せ駛る。

北條入道早雲は
伊勢の住人新九郎
其名長氏氣慨あり
初め一劒携へて

普ねく諸國漂遊し
駿の今川義元に
客たり時に功を樹て
伊豆菲山を守りける
今ま一城の穴得たり
是より天下覗はむ。

同じ碌なき浪々子
七人會ひぬ伊勢國
太神宮の前にして

神水飲みつ誓ひけり
先づ一城の主たる者
後六人は臣たると、
早雲果して君と爲る
夏は涼しき修善寺の
溫泉に浴びて大丈夫も
往時を偲び涙せり

菲山の城小なるも
天下の山河前にあり

賦稅を輕く政令を
改め民をいたはりぬ
遠近聞いて子の如く
將士の心彼は攬る、
伊勢新九郎此秋と
堀越殿に火を放ち
終に豆州を押領し
北條早雲と剃髮す。

三鱗の徽號伊豆山の

雲と風とに翻へり
明應九年相模伐ち
小田原城の主となりぬ、
是より先に大森の
實朝死して乘ずべし
早雲城を取らんにも
箱根の險に阻められ
豪雄指を咥へしが
奇策は成れり函根山。

長亨四年春四月
早雲菲山に獵せしが
獸を逸す願くは
箱根を假せと百餘人
獵の衣裳に函根踰え
牛數十頭法螺貝に
鬨を作りて攻め取りぬ、
英雄婦女を欺かず
戰國の世に變妙の
奇計は今も外交に。

早雲一日小田原に
馬盗人の捕はれぬ
賊長氏を凝視めつゝ
某馬をぬすみしが
國を盗みし人如何
早雲奇とし免しけり、
上杉顯定薨ずるや
三浦義同鎌倉の
新井の城に撃破り

相模を總て領したり。
匹夫起ち手に唾して
關八州を横行し
東海天下雄視せり、
其子氏康亦豪に
一生勝利三十六
敵に後を未だみせず
刀槍面と數ヶ所の
面創氏康創といふ、

嗚呼早雲よいつの世も
早雲を待つ秋日和。

豐臣秀吉

匹夫草莽に起りつゝ
隻手空拳を揮ふては
天下關白の權握る、
尾張愛知郡中村の
彌助の妻が春の夜
赤き日輪ふところに
入ると夢みて產れたり

桃太郎にはあらねども
此子艶あり赤くして
日吉丸とは名づけたり。

天文五年丙申の
正月一日呱々と宵
彗星の如東方に
光二倍の靈星の
箒のごとく現はれぬ、
細き灯に抱き視れば

猿の眼の瞳子二つ
鋭く威あり人を射る、
中村の老夫等關白の
種と知るべき草の家に。

日吉長じて腕白の
小僧となせば光明寺
佛像毀はし兒大將
父母も一村驚きぬ、
十三家を出で奔り

彼方こなたを犬の如
彷徨ふ果ては三州の
水射り流がる矢矧川
岡崎の橋の月影に
乞兒となりて横臥しぬ。

日吉大膽甕に似て
槍の長柄を握りつゝ
焔の如き氣を吐きて
野武士張本蜂須賀の

群を止めて誰何しぬ、
十八元服藤吉郎
濱名松下に仕へしが
鎧の代を持ちしまゝ
嘲笑ひつゝ英明の
主は何處ぞと武士姿。

永祿元年の秋にして
小牧山なる狩くらに
織田信長に知られしが

猪鹿獲ずして大なる
六十餘州を手にしたり、
忠義卑賤をかへりみず
霜に懐中主の爲に
草履摑みし掌
他日天下を收めたり、
非凡の人も苦心あり。

洲股城の守となりて、
三好松永京に討ち

公方に劍を賜はりつ、
金の瓢箪吹貫に
吉川小早川愕かせ
英雄山中幸盛の
末路を吊し高松の
清水長左衛門水攻や
三日將軍光秀を
山崎合戰に誅戮す

佐久間玄蕃を賤ケ嶽

駒諸共に睨らみ退け
勝家北國に滅びたり、
天正の年一躍し
關白の位身に占めて
己が心を象徴れる
大佛殿を建立す
聚樂御幸の美行列
音羽の峰に照る月の
いつ虧ぐべしか豐臣に。

今は海内を平定し
豪氣あふるゝ心やり
五畿七道の兵を驅り
朝鮮征討の師を起す、
天正十五年赫々の
關白の稱ゆるされぬ、
吉野の花のながめして
伏見桃山に城築き
美姫淀君と醼樂の
盛る醍醐の花見かな。

加藤福島片桐や
功臣雲の如くとも
人間の命まぬがれず
慶長三年夏八月
不世出なる英雄は
桃山御殿に薨じけり、
松の翠緑の東山
阿彌陀ヶ峯に祀られて
祐松院殿正一位

豐國大明神と諡す。

五尺に足らぬ猿面郎
明使の齎ちし國王の
封書を裂きて火の如き
豪快世をば曠うす
稀の天才政治家よ、
吾れ東海の春の旅
名古屋の黄金の鯱鉾や
菜種の花に目も眩ゆる

豐太閤を懷ふては
朝日に歌を吐けるかな。

加藤清正

西九州の天際に
阿蘇は煙と火を噴きて
夕陽の雲に聳立つ
熊本の城繪に見ても、
天正慶長その昔
豪雄肚裏に誠ある
加藤清正公一代を

幻の如浮び出づ、
やまと兒童にローマンス
長き槍持つ大將よ。

加藤幼名虎之助
其祖藤原鎌足公
尾張愛知の中村の
鍛冶五郎助の悴にて
永祿四年生れたり
母は太閤の徒弟女なり、

三歳孤となる同村に
福島市松桶屋の子
數代三河の郷士にて
共に强力村に鳴る。

清正母に養はれ
山家の賤に忍びしが
めぐり遇ひする英雄日
藤吉郎に洲股の
城下に遊び見出さる、

小兒の眼中清しくて
威あるに木下善しといひ
加藤が後に長大の
士卒數多を從はせ
洲股城内見廻らす。

大道白刃の閃くは
松の根方に豪傑の
浪人井上大九郎
木村又藏を仲裁し

清正之を臣としぬ、
天正十年三月に
備中の城攻落とす
祖先は加藤武者といひ
蒙古合戰に出陣し
名を九州に轟けり。

かの賤ヶ嶽七本槍
古今の槍の戰に
槍の歴史のすばらしき

華々しさを現はしぬ。
北國山路正監が
一丈柄ある槍握り
青貝柄なる片鎌の
槍を揮ひて清正は
猛將風に鬪ひぬ、
男兒天下に槍を出せ。

本多忠勝と見ゆるや
赤革をどしの胴丸に

桃實の鉢に長烏帽子
蛇の目を白く散したる
陣羽織着て大太刀を
槍は丈二尺穂は永き
一尺八寸の片鎌よ、
德川の豪平八郎
黑革縅鹿角の兜
蜻蛉切てふ名槍や。

文祿の年豐公が

朝鮮征伐を企つや
名護屋に兵を五十萬、
清正小西行長に
三日遲れて朝鮮の
釜山に上る清正は
豎子の跡をば追はんやと
別路を取りて火を放ち
守將ら首を千五百
加藤が逕は毎に險。

鬼上官として八道の
啼く兒も呼べば泣き止みぬ、
順和兩太子擒ふるや
縛る索目をゆるめつゝ
食を進めつ酒與ふ
英雄情あり涙あり、
蔚山にての籠城に
壁と紙嚙み馬血飲む、
海邊遙かに富士仰ぎ
兜を脱ぎて三拜す。

物は熱烈信仰の
南無妙法蓮華經旗風に
國の內外皆靡く、
慶長元年七月夜
畿內地震し清正は
伏見の城に馳せ見舞ふ、
清正文武の名將の
史記を朱引し論語讀む
一番槍に闇の坂

念佛唱へ敵を刺す。
家康二條城會見に
秀頼送り歸り後
清正短刀を懷に
取出しつゝ噎びつゝ
今日聊か豐公が
恩に微臣は報いたり、
慶長六年六月に
薨ず行年五十一

墓は池上本門寺
日は永久に温かき。

黑田如水

男兒生れて三寸の
胸に天下をはかるべし
野戰攻城の功なくも
帷幄の裡に深く居て
智謀神算雲の如く
勝を千里に決すべし、
宇宙は何れ大戰場

四時國と人優勝の
日月の下劍戟の
絶えず見えざる血は流る。

豐公將あり黑田如水
劍を把らぬ掌に
豐臣德川讎弄し
諸侯猛將飴の如
戰國の間雄視しぬ、
孝高甫め勘兵衛と

後剃髮し如水軒
播州姫路城內に
首を縮めて白鷺の
天下の鯤魚窺へり。

豐太閤に仕へしが
伏見の城に賣卜者
群臣の中見回して
如水の貌に將軍の
他日天下を握る人、

器量は海か日の如き
秀吉は言ふ張良と
諸侯築城槍刀を
集むる間に如水軒
窃かに野心磨きけり。

秀吉一日稠座にて
余が死後誰か將軍の
四海の權を統ぶるべき
臣は皆云ふ前田德川

秀吉頸を打掉りつ
否々黒田如水なり、
渠の手足の恐るべく
日本のみにて飽たらじ
海の外まで伸ばすべし、
英雄機略熟す何時。

備中高松遠征に
信長弑害の報到る
主從愕然色あらず

獨り如水は一讀し
秀吉の膝輕く叩ち
天の加護いま得給ひぬ
最早心の儘何か、
或日秀次に答ふらく
我れ豐公に及ばざり
故に中位の大名と。

如水は恒に語るらく
神の罰より主君の罰

臣下の罰も怖るべし
主君の罰は赦されむ
天下の望失はゞ
遂に國家を亡ぼさん、
如水は夙に百姓に
士卒に禮に遇らへり
肚に心刀鋭くし
外は勇士を養ひぬ。

九州虹の松原に

鳴く蟬止めし軍議中
朝鮮討つは德川か
前田かもしく如水なり
加藤小西は若くして
只武勇なる騎將のみ
立て大聲に放語しぬ、
曩に毛利と備中に
九州の城血を塗らず
如水の恩威智計にて。

英雄世をば欺むくか
豐前菩提山春の日に
花に吟じて行樂し
太閤堺千利休
京の醒ヶ井茶の會に
茶碗いぢりに考察す、
あゝ幾度か胸深く
神秘に附せし大野心
太閤薨じ關ヶ原
戰後に漏れて閃めきぬ。

如水枕頭死に臨み
嫡子長政呼び曰く
一騎駈槍を振はずも
我は博奕上手なり
東西分け目の關ヶ原
三十日を遲るれば
天下爭ふ筈なりき、
兒よ其時は寵愛の
故も何か見殺さん

大望親も子も非らず。

大阪落ちて夏の夢
天下家康の有に歸し
兵を談ぜず世を忘れ
京は鴨川の滸にて
心靜かに暮せしが
家康の爲め毒殺に
慶長九年薨じけり
嗚呼黑幕の梟雄は

天下他の手に讓りつゝ
永劫土に埋もれぬ。

眞田幸村

策運らすも槍把るも
戰國の世に秀てたる
英雄の血は三代に
傳はる眞田幸村は
子大助と身を殺し
豐臣家には仕へたり、
德川の勢狂瀾の

寄する怒濤を廻さんと
踏止まりて大阪城
忠義の鬼と滅びたり。

天目山より歸城すと
上杉景勝の大軍を
三寸の舌に說かんとす、
家臣遮ぎり幸村に
辨舌にては通り得じ
金剛兵衛が氷刀を

試して後と差付けば
睨みて愚か其劒
天道背く景勝を
斬れと靜々通りけり。

北條の軍五萬騎を
四百餘兵に擊破り
前代未聞と昌幸は
兒を悅びて六流の
永樂錢を定紋に、

十四歳にて上田城
徳川北條織田の勢
竹束松明眼潰し
奇計大膽一萬を
瞬く間に破りたり

上田の城に秀吉の
幸村見るや十四歳
色白隆鼻額廣く
眼光烱と尋常に

非ずと英雄看破しぬ、
六韜三略學びたり
幸村も亦秀吉の
天器の相を認めえぬ、
尾州犬山の城攻めて
北條氏政を退けぬ。

慶長元年の夜更けて
幸村空の天文に
太閤が命已に盡き

奸臣互に世を奪ひ
四海亂るゝ象を觀る、
關東の軍振ふとも
後の秀頼に竭さんと
上田の城を立去りて
深智を胸に父と子は
紀伊九度山へ隱れけり。

眞田昌幸死に臨み
德川の首手向けせよ

よし我死すも甲冑を
屍體に着せて兵仗に
紀の川底に沈むべし、
英雄世をば欺きて
幸村痴となゝ一度山に
木綿糸にて紐を組み
賣鬻ぎては家資に充つ、
春花なくも木の葉散る。

日出てゝ畑に耕しつ

夏の夕立稻妻の
嗚呼戰國の快男子。

木村重成

昔は花のよし蘆の
浪華の名ある大阪の
北の公園中の島
木村長門守重成と
高き眞白き花崗石
金字に深く彫られたる
表忠の碑ぞ建てらるゝ。

春夏秋やはた冬も
朝日夕日に輝きて
旅人仰ぎ過ぐるなり。

流れ止まざる淀川の
難波の橋に佇めば
東の空に大阪城
聳ゆ白壁松ケ枝の
墨繪の如く見ゆるかな、
あゝ天守閣豐公の

豪奢盡せし夢の跡
春の夕月三ケ月の
美姫淀君が美はしゝ
艶に冴えたる眸の如し。

懐ふ大阪夏の陣
累卵の危を前にして
廣き嚴しき城中に
奸臣美人はた勇士
雲の如くに群れゐたる、

關白の恩を忘れざる
四方より來し豪傑の
中に優しき若武者の
花にも似しや交りたる
匂ふ長門守重成よ。

薄命公子秀次の
自刃に殉じ妙心寺
父、常陸介自殺して
母は江州に隱れゐ

一子重成生落す、
長じて怜悧紅顏に
主秀頼と乳兄弟
豐公之が傅となしぬ
禮あり義あり情厚く
眞の武士ぞと一家中。

慶長十九年春二月
二十歳にて入城す
眞田後藤と長曾我部

四天王と呼ぶ大阪城、
今福堤の初陣に
東北の雄名に高き
佐竹の軍を撃破せり
中白の旗重成は
丸扇の旌佐竹勢
春の風下敗走す。

關東方と和議成りぬ
若き重成使者として

向ふは馬に茶臼山
僅かの從者後にしつ
藤堂井伊の營を過ぎ、
陣中の禮と振拂ひ
刀を提げて靜々と
列座の間怖れなく
家康が前進みつゝ
血判の紅見屆けぬ。

此日重成首途に

態と衣服を輕裝に
再び、生きて還らじと
決死の色ぞ見えたりき、
群臣武具の山なすも
勇士と正義何にすべき、
老獪の將に痛々と
枯血を指に紋らせぬ、
荆軻易水秦に往く
その慷慨に似たりけり。

元和元年大阪の
事は愈よ迫りきぬ
重成時に風邪うれひ
五月五日に床出でつ
湯を浴み髪を洗ひけり。
頓て江口の舞の曲
紅花の春の朝をば
靜かに謠ひ皷を擊ちぬ、
其の宵花妻十八の
散りしも哀れ自害しぬ。

運命の影今日はしも
若江堤ぞ悲しけれ
三間柄なる長槍を
馬上に揮ひ重成は
雲霞の敵に突入りぬ、
井伊の軍勢藤堂の
將卒斬るぬ算もなく
隴に手を負ひ下り立てば
鮮血淋漓紅ゐに

槍の穂先に傳はれり。
今日漸やく豐臣の
恩に死を以て報いたり
道が武勇の英雄も
駒諸共に斃れけり、
家康首級の實檢に
冑の忍の緒ぞ切れて
髪にたき籠む名香に
武士の覺悟と感嘆す、

重成齡ひ廿一
歴史の花ぞ傷ましき。

蒲生氏郷

夕陽荒煙のぼりつゝ
元龜天正の其昔
刀槍金甲春の花
四方群雄割據して
天下は取るに任せたり、
大志抱いて小天地
驥足伸べえず東北の

會津一城に終りたる
梟雄蒲生氏郷の
運命の末哀しけれ。

戰國の史を繙きて
英雄覇者の事業こそ
面白くまた果敢なけれ
策あり血あり涙あり
情の中に劍藏す
風雲晴雨測られず、

不世出なる大閤の
巨頭の下に氏郷は
鋭鋒遂に發し得ず
恩に買はれて滅びたり。

ロマンチックの武の開祖
田原藤太が血を嗣ぎて
弘治二年に誕生す
父は江州日野城主
世々蒲生郡領しけり

十三出でゝ父の爲
織田氏が許に質となる、
秋に國内戰亂の
毛利北條上杉等
信長王者の勢ひや。

智は小刀の光るに似
敏慧名をば鶴千代と
日暮信長が傍に侍す
信長才氣感嘆し

女を娶せて駙馬と爲す、
光秀が亂に二十七
柴田羽柴の内訌や
小牧長久手の戰に
一人先見の明ありて
秀吉の軍赴きぬ。

會津に封を移さるや
天下の浮浪あつめつゝ
大名が爲す梁山泊

誠と信と義によりて
士は諸方より雲集す、
天正十三年九州に
太閤島津攻めし時
小倉岩酌城に勝ち
萠黄に柳縫ひこめし
紅梅裏の羽織賜ふ。

伏見に軍議氏郷は
朝鮮我に與ふれば

獨力行きて征せんを、
太閤曰く今の世に
前田徳川唯ひとり
恐るべきもの氏郷と、
俊傑後に來るべき
其の運命を前知すか
畫工に姿繪にかゝせ
江州菩提所に納めしむ。

畿内に蒲生を憚りつ

秀吉奥羽に封じ棄つ
會津は北地要喉の
前後正宗家康の
妨げありて伸ぶるえず、
氏郷退き大廣間
柱に凭りて涙ぐむ
臣最と祝ひいへば
會津百二十萬石
我は是きりと小聲にて。

夜城樓の高きより
五十四郡の秋の月
英雄恨み幾ばくぞ、
氏郷時に三十二
隣國正宗二十四
眉目秀麗の梟雄と
獨眼黑面怪傑と
豐臣がために狡兎追ひ
鐵火は常に熾りつゝ
野心の穗田し欝を遣る。

會津黑川故郷の
江州の景懐かしみ
若松城と改めぬ
天正十九年秀次と
平泉五串賞せしが、
愈よ諸國浪々の
勇武の士をば養ひぬ
大に國内經營し
百二十萬石郡下の爵

多く裂かれて費しぬ。
文祿四年黄昏に
伏見の城に太閤が
茶を進められ餡給ふ
氏郷喫して邸を出て
血嘔き京都に殪れたり、
和歌を殘して四十歳
天下爭ふ大抱負
一片餡の毒と消ゆ、

骨は紫野大徳寺
恨みは永しほとゝぎす。

伊達正宗

さんざ時雨か茅野の雨か
音もせでさて濡れかゝる、
雲北に迷ふ陸前の
躑躅ヶ岡や宮城野の
萩の花さく露の草
廣瀬川畔をさすらひて
若き詩腸を絞りけむ、

仙臺市中青葉城
古杉晝暗き正宗の
廟は寒き雄風や。

正宗幼名藤二郎
剛勇沈毅東北の
重鎮を以て任じつゝ
其一生は戰國に
鬼神の如く唄はれぬ、
短軀二の引紋所

膽は飽まで大にして
面貌くろく額廣く
釣りたる眉と一眼は
潰れて凄し獨眼龍。

陸奥五十四郡の半圓と
出羽十二郡を領しつゝ
祖先以來に武に鳴りて
竹に雀の定紋の
威は東邊に振ひけり、

正宗負けぬ氣を練りぬ
千金の茶器値を知らず
石に擲ち碎きたり
彈丸肩を縮めしと
雨注の壁に態と立つ。

然れど正宗機變知る、
天正十八年三月に
秀吉小田原攻めし時
猪のごと馳せ來り

鐵甲鐵馬に領したる
地を奪はるも背じぬ
太閤旆を奥州に
樹つるや那須に奉迎す、
秀吉西に歸る後
吉晴を煽動て亂せしむ。

小田原の城徒然に
東夷も一與と
秀吉が前に出でし時

荒き毛髪櫛荒く
茶筌に金銀紅白の
太き水引卷上げて
生絹の衣の雪白に
豹の皮なる法眼袴
異樣異風の扮裝に
太閤眼を張り膝を打つ。

正宗今年二十四
十八家督續ぎしより

會津佐竹に最上討ち
一度も敵に破れざり
時運は非なり太閤が
天成の偉は陰するを、
血骨に得たる會津道
氏郷の爲め横取られ
遺憾千秋雲ちぎれ
獨眼龍の眼の光。

大丈夫豈に障り有る

一杯の土に腐心せん
鵬翼大に張るべしと
丈倉六右衛門使して
海洋遠く南蠻に
墨西哥を經て羅馬國に
英雄圖南は夢なりき、
一揆の咎に加ふるに
邪教派臣の嫌疑に
復た太閤に引出さる。

正宗勇に文を兼ぬ、
江戸邸内の能樂會
正宗裙を踏みたりと
旗本又四郎刀を拔く
渠立進み見返らず、
仲直りなる酒杯に
打てや・胸だにはるならば
夜討曾我中曲謠ひ
洒落と膽に正宗は
江戸侍を震はしぬ。

武藏鐙に紫手綱
乘せてやりたや何處までも、
正宗自ら歌ひつゝ
一軍士卒和せしめぬ
吾れ高く誦し情緒湧く、
西雲州に英傑の
山中鹿之助甲冑の
前に半輪の銀印
勝を三ヶ月に立願す

之れ東西の風流雄。
秀吉家康前後ろ
鬼神も手足いたづらに
奥羽の雪に埋めけむ
圖南は夢にすぎざりき、
覇氣と野心の漏塲なき
伊達の猛者に一掬の
思を濺ぐ英雄史、
天下片目に窺ひし

北の不遇の強者よ
正宗廟の鉾杉よ。

山田長政

英雄地の産む自然の子
山水の境靈ありて
奇氣に富みたる士を出す
富士は駿河に仰ぐとき
形姿嶮しく雄大に
尖り雲吐き望まるゝ、
梟傑山田長政は

駿河安部郡藁科郷
怪傑由井の正雪は
静岡在の紺屋が子。

海外萬里の暹羅に
日本の甲冑太刀槍の
威を光輝せし長政は
農家の子たり名を政藏
腕白群兒が大將に
放逸不羈に無類なり。

父母は寺僧に入れんとし
一村惡み逐はむとす
政藏逃れて駿府なる
紺屋嘉兵衛が家に依る。

書劍長じて桑の弓
四方を多年漂遊し
富士の麓の市に還り
自ら姓名改めて
山田仁左衛門長政と、

山の奇矯兒成功者
北條早雲を學びつゝ
嵎に潛める虎の如く
眼を眈々と一小市
天下の隙を窺へり。

時や久しく大平の
世を擧げ墮弱春の日の
靜かに凡く治まりぬ
長吹心熬立てり、

男兒の抱負未だ得ず
欝勃の情堪へがたし
友あり來り仕を勸む
我の願ふは天下たり
人の奴僕に非ざると
哄然呵々と大笑す。

鵬鳥今や翔るなり
駿府に住める貿易業
瀧太田なる二商人

南に行くに追從す、
船中既に王の如
船頭水夫長政を
舟の獅子よと怖れ爲す
彼れ暗殺の危を知りて
足を臺灣に留めしが
小島數月氣は塞ぐ。

機は來りけり南蠻の
暹羅隣り六昆と

鬪ひ非なる報を得て
雀躍船に赴きぬ、
一日長政高邱に
登りて戰爭鳥瞰し
暹羅軍の捷を的て
英名俄に居留地の
日本街を震撼す
南の瑞雲渠が上。

長政乃ち日本街

功名に饑ゆ健兒等を
海を渡りて携へし
巨櫃開き鎧甲や
刀槍武具を取散らし
軍裝騎馬に招きけり、
豐臣遺臣在りし者
我も〳〵と仕舞ひたる
鎧具足に結束し
長政麾下に集まりぬ。

大和猛夫は五百人
邏羅軍兵二千人
窃に廣く言振らす
山田長政大將に
一萬日本天兵の
邏羅援軍に向ひたり、
六昆騷ぎ色なきに
長政宛ら雷の如
日本男兒の勇戰に
六昆潰え將を虜す。

赭顔六昆再擧して
國を盡して十萬軍
雲霞の如く來攻む、
長政進み山麓の
野と海岸に狹擊し
六昆軍を逆落し
怒濤と巖に粉微塵
魚腹死す者數萬人
北ぐるを追ひて都城入

王を擒し凱歌しぬ。

是に長政六昆の
地に封ぜられ王と成り
暹羅國王が女を娶り
亞細亞半圓威を振ひ
印度の諸國使節しぬ、
暹羅王死し宰相は
后妃と通じ長政は
嗟吁恨むべし毒に斃る

亞細亞併呑夢として
異域英雄骨動ごく

近藤重藏

北境雲の漠々と
かの起れるは强露西亞が
千島を侵す煙なれ、
幕府鎖國令布いてより
寛政四年露の船は
また松前に來りしも
幕府交易退けぬ

是より餘年屢々も
砲聲煤煙海の上
靜けき江戸を騷がしぬ。

寛政年中改革に
賢明松平定信が
天下偉材を諸侯伯
航海術を研鑽す、
幕吏近藤重藏あり
自ら深く蝦夷に入り
地勢警備を調査して
國家の爲めに蓁莽を
開拓む事を乞出でぬ。

冒險英雄重藏は
江戸方與力右膳が子
明和八年駒込の
鷄聲ヶ窪に生れたり、
長じて卓落强力に

軀は六尺に文武道
十八與力見習に
彼れ俗吏たる甘んぜず
寛政十年幕吏等と
北海踏破歸京せり。

此時重藏一行に
別れて進む更に〳〵
國後七月擇捉に
風濤冒し渡りけり

島は樹蒼く熊狐
怪鳥夥多群がりぬ、
茲に到るや自然木を
刳りて造りし丸木舟
細き艫櫂は幾度か
荒るゝ巨浪に取られけん

波に馴れたる夷人すら
年一回の凪の日に
漸やく渡る離れ島

重藏露領に死すとても
日本の捧杙樹つまてと、
甲冑着けて舷端に
眼を瞋らしつ船頭を
太刀を揮ひて叱咤せり
擇捉海峽波艤も
恐れを爲すか屈きえぬ。

蝦夷に蔓石磊々の
惡路を拓き醜土人

猛獸寨さと鬪ひつ
サルムカラにと進みつゝ、
源義經遺跡てふ
叢葎の中に建石の
放浪英雄吊しけり
北海の空底蒼く
捲舞ふ潮雲眺めては
宙外魂を飛ばしけむ。

淡路小島の奇男兒の

松前貿易營める
高田屋嘉兵衛とゆくりなく
蝦夷が蠻地に會しけり、
幕府に意見書奉り
嘉兵衛と共に擇捉に
日丸の旗眞紅なる
吹拔幟押樹てゝ
二百六十里土人七百
島を踏査し終りけり。

雪風怒濤難に
豪骨豪魂凌ぎつゝ
江戸に還るや重藏は
文政二年幕命に
大阪弓奉行任ぜらる、
先に千島を探險し
北海の功勇懷ひては
俗地庸吏の堪へがたく
英雄鬱氣肉に入り
酒杯に虹の氣を吐けり。

時に天満の與力にて
天保八年大阪に
救民の旗押立てし
大鹽中齋と親善す、
初め大鹽の訪なふや
書院に待たす時餘り
床の百目砲一發に
近藤出づる御美事と
盃の鼈首切りて

生血を啜りぬ平八郎
文政三年重藏は
埒傲傍若無人なり
幕府奉行を免黜す、
近藤不平身を燃やし
江北に住む瀧の川
谷文晁に繪を描かせ
开を像刻し咎めらる、
目黑に死せり五十三

今ま瀧の川甲冑の
石像秋匂ふ紅葉に。

雲井龍雄

東京谷中を旅人よ
墓地を通れば紫の
空に葉枝を擴げたる
太き黒松の下蔭に
雲井龍雄の碑ぞ立てる、
男心や英雄の
覇氣を象どる丈五尺

肩の尖れる自然石
青き面は滑らかに
撫てば刺戟す掌を。

狂瀾既倒に廻さんと
東北の端に一人起ち
壯圖半ばに遂げずして
恨を呑みて快傑は
江戸に囚はれ斬られたり、
龍雄羽前の米澤藩

父は中島總右衛門
弘化三年春生る
幼名猪吉七歳に
和歌書を善くし劍學ぶ。

蛟龍當に躍ねんとす
慶應元年二十二に
意氣は旺に錦城の
江戸に上りて藩邸の
警護の役を務めしが、

時は尊王攘夷の世
安井息軒の門に入る、
突如東し米澤に
遠山翠と稱しつゝ
よいかな洒落塾長や。

慶應二年曙に
慶喜大政奉還し
伏見鳥羽役薩長に
奥羽朝敵名を負ひぬ、

龍雄は江戸に放浪し
薩長私威を振ふとて
關八州の武を以て
大に西を討たんとす
米澤に入り兵率ゐ
北越兩毛奔馳せり。

慨然悲憤劍晃る
明治元年六月に
風雲暗く危急なり

茲に愈よ姓名を
雲井龍雄と改めて、
直に越後出陣の
備後守に建策し
薩長二藩離間する
討薩の檄論ぜしが
奇策惜くも容られず。

奥羽同盟成らずして
若松の城狼烟す

揚るを望み歸來せば
米澤既に西に降り
諸侯封土を返還し
天下大勢定まりぬ、
龍雄切齒し炎々の
火鉢を取て座に擲げぬ
明治二年の春江戸に
數寄屋橋の寓潛匿す。

龍雄形勢窺ひて

二本榎の巨刹に
壯士三千を集めつゝ
誓書を作る數十條
正義愛國を說諭せり、
恰も朝庭參議院
彼は入りしが曩日の
賊名のため嫌疑され
議院の壁に慷慨の
一詩を殘し立去りぬ。

脫兵鎭撫の名の下に
歸順部曲點檢所
原直鐵等僧大舜
志士は四方に雲集す、
日光甲府奧羽東海
東京を衝く計畫の
哀れ破れて捕へられ
米澤藩邸幽閉の
詩歌風月に不平遣る
夏に朝庭奸吏多し。

檻車刀根川に血吟し
龍雄は京に送られつ
斬られて首は小塚原
寒き木上に曝されぬ
明治三年十二月
其死に臨み一笑し
天を仰ぎて斃れけり、
龍雄容貌婦女の如
博浪沙なる張良か

膽斗に似たり死する迄。
過り賊の名を負ひき
誓書に國家干城に
死して忠義の鬼と記す、
只薩長に憤慨し
佐幕の名をば假りしのみ、
龍雄は空に龍たらず
吏刀の錆と消えしかど
嗚呼一世の快男兒

奇傑の意氣は雲の如
とこしへ光り漾へり

高杉晉作

眞男子にて快男兒
東行高杉晉作は
二十九年の短生涯
目にもとまらぬ稻妻の
天馬の空を行くに似て
華々しさに血を交へ
東西の傑並ぶなく

維新の御代を振はしぬ、
多恨多情に熱烈の
詩人肌なる英雄よ。

高杉一人在りし爲め
徳川幕府大軍を
馬關の海より入れざりし
豪膽無比の快傑は
天保十年長門藩
萩にて生る幼にして

言行不覇に氣は勝れ
撃劍賦詩に歌俳句
後は兵書を學びたり、
藩中呼ばるゝ神童の
鯱は四海に跳ねむとす。

安政四年十九歳
維新回天の業爲せし
英雄出てし松下塾
吉田松陰が門に入り

伊藤品川山縣と
同じ窓にて教訓受く、
梟俊久阪元瑞と
吉田の塾の二秀才
高杉こゝに放縱の
翼を收む星霜や。

驕兒六年江戸に入り、
昌平堂に各藩の
士と憂國を痛論す

國に歸るや廿三
藩は近侍に拔擢す、
幕吏從ひ上海に
視察を爲せり烱眼に
快雄席に足付けず
江戸に趣き櫻田の
邸に在りしが脫藩す。

竹輿を僦ひ淺草の
猿若町を通る時

品川彌二郎松陰を
小塚原の墓參途
輿の簾間の長刀に
友と知られて佇めば
晋作簾内より彌二々々
僕は常陸に行くなりと、
後に井上伊藤等と
高輪公使館燒打す。

松陰先生の骨奉じ

上野に來り肅々と
天下將軍の橋騎馬に
幕吏を叱し通行す、
高杉西行の風韻を
慕ひ東行と號しけり、
此時薩と不和釀し
京の長士の落つ多し
外國船を長藩は
馬關の海に擊退す。

時に長州有名の
騎兵隊いま組織成る、
三條東久世七卿の
京より追はる高杉は
憤起幕府を討たんとす、
外艦馬關に現はるや
帛服錦袴蛇目傘
絃妓を率ゐ伊勢音頭
毛唐はこれで澤山と
藩の陣中躍入る。

俗論佐黨跋扈して
長藩の志士危急なり
高杉逃れ筑前に
西郷南洲と解逅す、
馬關に還り署を襲ひ
同志來らず雪上に
痛飲淋漓熱罵せり、
恰も薩長聯合の
議有り高杉聽かずして

咄薩軍を假らんやと

慶應二年幕府更に
長門問罪の師を起し
周防大島侵し來や
高杉一艦舷上に
立ちて叱咤し擊破る
英氣凛々神の如し、
次て對岸上陸し
萬歲服に扇子持ち

弱兵之て足れりとて
攻て小倉を陷したり。

長門を征ちし蹉跌こそ
幕府瓦解の一歩なれ
高杉膽氣甕の如く
昔儔あり源九郎
戰略上の天才は
慶應三年夏の風
月の馬關に病みて死す、

嗚呼我が維新大業の
詩的英雄快傑と
海の轟ろに叫ぶかな

吉田松陰

改革者にして經綸家
海外文明の先驅者の
二十一回猛士松陰は
長門風光明媚なる
萩の城下に人となる、
終生愛國の血は燃えて
南船北馬蜑が宿

席暖まる遑なく
艱難長し楚囚の月
刑場の露と消えし人

松陰吉田寅次郎
杉百合之助第二子に
天保元年夏八月
萩松下村に産湯せり、
六歳吉田が家を續ぎ
世襲山鹿流兵學を、

十一藩主前に召し
武教全書を講ぜしむ
少年既に達人に
萩の城下の一名物。

萩は山背に海控へ
松綠なる松下村
英雄搖籃の清き土地
天下に鳴りし松下塾
高杉桂品川等

維新諸傑を出したる
我が宏業の史の上に
永く國民の記念かな、
壯年腐儒の書を棄てゝ
活眼世變を烱破せり。

嘉永三年九州に
豪傑の士を訪ねつゝ
西遊日記著はしぬ、
四年藩主に扈從して

江戸に上るや松陰は
相模安房をば歷遊し
海波眺めば帝國の
警備を夙に懷ひつゝ、
藩邸脫し下總に
水戸筑波山登高詩。

銚子の港に刀水の
潮と搏つ觀て感激し
會津若松城に入り、

越後松前志し
船來らぬに波の上へ
佐渡ケ島へと押渡り
順德帝の御陵に
無念紅涙ふり灑ぎ
青森盛岡日光に
行く觀察と慷慨詩。

嘉永六年西の方
藝州を見て瀨戸の海

夕陽の美に詩腸染め
讃岐多度津へ琴平社
白峯山に崇德陵
西行の泪偲び添へ、
後大阪に大和路を
森田節齋叩柴し
江戸に還れば長崎に
露艦來ると世は騷ぐ。
師象山と幕政の

頑迷憤し航海の
危務を共に論ぜしが
安政元年米艦の
下田に來り砲聲す、
象山幕府に建言す
俊秀の士を海外に
遣はし事情通ぜしむ
此秋にして何時かある、
幕府は容れず海廣し。

男兒一たび鴻翼を
挫くは誰ぞ運は天
松陰乃ち意を決し
窃に米艦に投じたり、
小舟を盗み下田沖
櫓を折れて哀し犢鼻褌
櫂に結へて屈さしが
浪も噎ぶか海の闇
黒艦前に浮き乍ら
船長許さず追放つ。

直ちに江戸に捕へられ
麻布毛利家預りの
檻輿長門に送られぬ
道途唐詩を誦しつゝ
意氣昂然と雲を凌ぐ、
松陰獄に謹慎に
孝義忠愛忘るなく
妹に答ふ涙の書
藩の許可に松下塾

開きて子弟薫陶す。
再び江戸へ上されて
安政六年天暗く
秋風吹くか志士が首
刀の錆に汚しけり
萩の花散る三十歳、
世田ケ谷の墓露の石
往きて旅人訪ね見よ、
松陰遺稿五十餘卷

永く天地に留むべし
嗚呼改革者情詩人

藤田東湖

雲あり風あり大海の
曲折波瀾少きも
勁烈一到貫徹し
大河の澄みて行くが如
夏尚ほ寒き名刀を
振ふが如き潔き
其の凛々の生涯は

藤田東湖に之を見る、
水戸の地勢と空氣こそ
俊烈東湖を生みしなれ。

一たび水戸と呼はるも
經學王道武士道は
明鏡の如く顯はるゝ
水戸公園の梅の花
馥郁として薫れるは
其の魂の象徴か、

常陸に一歩入るゝ時
頭腦に觸るゝは茨城の
茨にあらず古來より
蒼々として劒氣のみ。

柔弱腐敗今の世に
その劒氣こそ男子には
最と懷かしき匂なれ
水戸に來りて青き空
蒼き空氣を吸へるとき

藤田東湖が面影の
幻の如髣髴す、
水戸は湖の國潮の國
いたこ出島の眞菰中
菖蒲も咲くや紫に。

水戸の權化の透徹兒
文化三年三月に
藤田幽學第二男
容貌魁梧慧敏に

長じて磊落氣宇廣し、
繩墨の外時として
漏らすに年少氣鋭なり
朗々恒に文天祥
正氣の歌を高誦し
士氣の衰微を浩嘆す。

經書の匂ひ高うして
水戸は武の國劒の國
東湖文弱拂ふとて

少年十五廿歳まて
弓槍擊劒練磨しつ
近郊荒廟に露宿しつ、
文武兩道秀拔に
槍の師範を命ぜられ
水戸烈公の知遇得て
藩中東湖の名は鳴れり。

父幽學は水戸名儒
慷慨憂國の老先生

寛政年間海隔つ
露の北境を上書して
罪を獲てけり老勇士、
此年英船一隻の
大津港に碇泊す
幽學東湖に酒別して
往さて夷人を斫れ汝
神州正氣伸ばすべし。

幽學死して二十二

東湖後繼ぎ二百石
彰考館の役員に
水戸が天下に名を馳せし
大日本史編輯の
頃は尙富む春秋に
東湖清議に忌憚なく
曲學阿世の徒を排す
川口總裁權弄し
少壯藤田と軋轢す。

敬三郎殿元服し
水戸齊昭と改まる
藩政の事纏まらず
三十餘人脫國し
後赦されぬ、日本史上
藤田立原相容れず
讒誣せられて出でざりき、
江戸に勤務し烈公が
天保年中光輝ある
敬神弘道二館成る。

尊王攘夷大頭目
東湖風采素朴にて
布の肩衣古帷子
鐵の金具の脇差の
欄は皮卷木綿糸、
二年の蟄居小梅村
回天詩史や常陸帶
作詩自ら慰めぬ
彼の廿五回刀水を

渡ると高く吟じつゝ。
安政二年十月夜
江戸大地震闇黑に
小石川邸壞れつゝ
雄鎭東湖之に死す
天下有識皆な惜む、
熱氣一往眞男兒
櫻田門外の活劇も
英雄東湖が心なれ

嗚呼一刀に一直に
水戸は湖の國潮の國

橋本左内

英雄の魂雪を照らす
政治家として志士肌に
詩人の血潮湛へたる
左内は越前福井藩、
父は長綱幕臣の
幼に神童七八歳
詩文を善くす寧馨兒

總て賢母が感化なり
三國史讀む時十歳
董卓曹操罵れり。

左内藩中の美少年
二十一史を愛誦し
岳飛が傳に移る時
紅瞼熱く濕ほへり、
恰も砲聲長崎や
下田に聞え世は騒ぐ

父が醫業を助けつゝ
大阪に出で遊學す
天滿橋下に乞食の
脈把り人を驚かす。

明主松平春嶽公
重用せらる若うして
水戸の東湖は先輩に
後明道館幹事たり
洋書習學所起しては

熊本の傑開國家
横井小楠招聘す、
江戸に上りて南洲と
宿舍の會に西郷は
卓見天下一品と。

橋本短軀瘦骨の
容貌婦女の優秀に
生平深く湖の如く
一端國家政敎の

事に及ぶや唇破れ
論議堂々懸河の辯、
幕府權臣急進の
川路聖謨を往說す、
二十餘歲に門下生
左內學藝景慕しぬ。

大の抱負を實行に
また世の爲に精勵し
醫學天文地理歷史

汎く左内は翻譯す、
福井の天地小に居て
東亞一にし歐洲の
大陸かけて收略の
世界的策經營す
江戸に劒の閃めく間
胸三寸に意縱横。

四方に多く交友の
外交家的手腕あり

活たる學者英雄と
詩人の質に富みたりき、
一日讀書執筆に
精力絶倫熱烈の
詩文隨筆山を成す
安政幕に捕はれて
血は迸しる慘劇に
筐底遺稿啼きにけむ。

曾て北陸飄遊し

敦賀に筑波旗揚の
武田耕雲齋墓に立ち
松の林に吊吟し、
去つて福井に春の雪
九十九橋の畔なる
左内が墓に詣でつゝ
白雪の上は熱涙に
紅梅の如染めにしよ
劒に殯れし詩人塚。

安政五年十月夜
常磐橋外邸内に
幕吏來りぬ虫の聲
左内を薄書と拉し去り
鞫問數回傳馬町
獄舍に暗き幽囚の、
安政六年十月秋
千住小塚原刑場に
蕭々の雨送られて
首は紫電と落ちにけり。

あゝ小塚原吾は佇ち
古き丈六地藏尊
こゝにて首を斬りしてふ
地藏肩ごし西空に
血の濃き雲を望みたり、
此處に松陰頼三樹等
萬延元年櫻田の
義士の墓石は並立つ
維新烈士が千秋の

恨を土に殘しけむ。
綠の松の傘をして
橋本左内景岳の
碑は青空に聳建つ、
秋に來りて茲に見ば
英雄若く留めたる
詩文は天に飛ぶ雲か
鳩は舞ふなり隅田上、
男兒愛する道に往き

あゝ小塚原吾は佇ち
古き丈六地藏尊
こゝにて首を斬りしてふ
地藏肩ごし西空に
血の濃き雲を望みたり、
此處に松陰頼三樹等
萬延元年櫻田の
義士の墓石は並立つ
維新烈士が千秋の

恨を土に殘しけり。
綠の松の傘をして
橋本左内景岳の
碑は青空に聳建つ、
秋に來りて茲に見ば
英雄若く留めたる
詩文は天に飛ぶ雲か
鳩は舞ふなり隅田上、
男兒愛する道に往き

劍に斃るも筆に死すも
さもあらばあれ秋の空

坂本龍馬

土佐はよい國暖潮の
南の風の吹くところ
男心の常磐木の
四季に榮えて青き國、
男子の首の血の色の
珊瑚の珠の出る國
固き鰹の節の濱

鯨潮吹き百丈の
水の柱や蜃氣樓
坂本龍馬が出でし國

海援隊の隊長の
龍馬容貌魁偉にて
身幹五尺八寸餘
龍が立ちたる如くにて
眼光烱々人を射る、
國事に四方奔走の

潮風暑き日に燒けつ
海國男兒の本領を
寛き衣に表はせる
快活爛漫快男子。

俊傑龍馬は南國の
土佐高知市の本町に
天保六年秋十月
鹽氣の風に生れたり、
初め龍馬は柔鈍の

蚯蚓の如く弱くして
十四歳まで奇童子の
洟を垂れつゝ街頭に
遊びて人に揶揄はれ
泣きては家に歸り來ぬ。

龍馬一日學業の
成らぬに自憤死せむとし
後鞭韃し文武共
照る日の如く進みしが

江戸に上りて劍法は
千葉周作が門に入り、
勝海舟に師事しつゝ
航海學を修めけり、
前の鈍物鈍ならず
豪傑天才今ま蛟龍。

波濤の外に鑑みて
大に海軍勃興を
當局藩に建言し

文久三年海軍所
兵庫の土地に建設し
勝安房之が奉行たり、
土佐薩長の脱走者
世界に眼開きし者
流の如く投じたり
紀州の智嚢陸奥來る。

陸には長州奇兵隊
海には土州海援隊

坂本中岡慎太郎
膽雄後藤象二郎
海援隊の組織成る、
幕府の馬關海峽に
長門を討つや海援隊
一艦率ゐ活動し
幕軍膽を寒からす、
我が海戰の嚆矢なり。

慶應二年三好等と

伏見寺田屋樓上に
幕吏に圍まれ一髪の
危を坂本は勝氣ある
少女が爲に追れえぬ、
時に女は浴に在り
紅を纏ひし仇姿
急を龍馬に告げしなり
英雄に添ふ花一枝
妻の龍女は彼なりき。

京都蛤門の一戰に
西郷大久保桂等は
幕府に軍を向けむとす
坂本後藤相謀り
藩主容堂動かして
德川將軍を說得す、
王政復古の曙の
旭日の鷄を聞く先に
血は傷ましく濺がれて
刺客の刃に斃れけり。

龍馬はさすが海育ち
色は黒くも其の喉は
艶麗珠を轉ばせり
盃把りて膝打ちて
ヨサコイ節を興に歌ふ、
浪花天保山小春空
土佐甲の浦還る海
室戸岬を鱶鮫の
風濤險惡に詩吟して

逆潮派手に乗入れぬ。
慶應三年十一月
鴨川千鳥夕暮の
しぐれに細く啼ける時
京都河原町宿樓に
刺客の刀の閃めいて
坂本中岡不意擊に
兩英雄は殞れけり、
龍馬盛年三十三

海邊益良男血を流し
尙ほ夕燒の雲と赤し。

西郷隆盛

青葉の上に雲そゝぐ
いつ來て見ても上野山
旅人去らぬ銅像よ
臺石高く漆黑の
南洲翁の魁偉の姿
曳く犬共に活ける如
八百八街瞰下せる、

小學兒童も親しみて
東京名所に數へらる
薩南英雄の銅像よ。

秋は傍の公孫樹
木の葉は雨とふり落ちて
十年役の城山の
彈丸雨飛を偲ばるゝ
吾れ幾度か杖をひき
黑きが中に光ある

英雄像を眺めけむ、
白く附着す紙玉は
來る旅人が尊崇の
涙と投げし記念かな。

氣候溫和に花開き
風暖かく極東の
波濤周れる帝國の
南の國の平和鄕
薩南の鎭豪骨よ、

度量宏大海の如
識見世をば曠うせし
王政維新第一人
至誠情あり熱もある
九州男兒西郷よ。

人よ鹿兒島西端の
士族町なる邸址
標の石は南洲が
生れし蹟ぞ吉之助

文政十年呱々の聲、
藩の學館書を學び
十五家道を助く爲め
出でゝ郡方書役たり
公大久保利通と
友とし遊ぶ双鳳兒。

嘉永二年の薩藩の
内訌高崎騒動に
西郷國家に志し

世の形勢を窺ひつ
島津老侯奉擁し
尊王大義唱導す、
先づ列藩を合同し
力蓄ひ徐ろに
幕府の政を革へんとす
老侯薨じ事書餅

安政疑獄忘じ難し
傷ましい哉尊王黨

幕吏問部の京に入り
梅田雲濱鵜飼浮田
刃の錆と消えうせて、
江戸に在りては松陰や
橋本左内頼三樹の
刑場露と斬られたり、
維新血史を繙きて
誰か悲憤に泣かざらん。

南洲の身に危急あり

伏見大阪舟出して
僧清水の月照と
遠く浮ぶや薩摩潟。
一葉の舟月影に
共に抱きて波に投ず
平野國臣側に在り
月照死して渠は蘇す
あゝ難波潟歌ひたる
蘆の末こそ哀しけれ。

是より再び西郷は
南の洋の一孤島
流竄の月日蠻煙の
中に二年を暮せしが
元治甲子に赦されて
讀書に窶れ鹿兒島へ。
幽閉江戸は水戸浪士
櫻田門外血染の雪
西郷藩政大手腕
兵備薩長連衡す

慶喜奉還鳥羽之役
西郷勝安房談笑に
江戸受取りて砲火劍
焦土に江戸を救ひしが
後飄然と歸西しぬ、
今征韓論破烈しつ
江藤副島板垣と
辭表を呈す決然と
陸軍大將綬を解きて

故山に耕す秋の風。
桐野村田や薩摩隼人
私學校なる健兒等に
止むに止まれぬ勢に
賊名受けて十年役、
あゝ田原阪三旬餘
城山落ちて松の露
英雄魂は復覺めず
鹿兒島墓は光明寺

錦江灣や櫻島
偉傑の跡を弔はむ。

英雄史詩

日本男兒

終

明治四十四年十二月一日印刷
明治四十四年十二月五日發行

英雄史詩日本男兒
定價 四十錢

著作者 兒玉花外

發行者 增田義一
東京市京橋區南紺屋町十二番地

印刷者 佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社秀英舍

不許複製

發行所
東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社
電話京橋八七四番八七五番
郵便振替貯金口座參貳六番

新渡戸博士序
山方香峯君著

十大德教家傳

上製箱入 正價貳圓
再版 小包料十八錢

日蓮、親鸞、仁齋、素行、益軒等我が國古今の代表的德教家十人を撰び其の人物性行等を評傳し併て米國學者大會に提出せるもの、人格修養に志なる士は是非一讀す可き名著也

毎日新聞記者
鹿島櫻巷君著

江藤新平

四六美本 定價四十錢
再版 郵稅六錢

宕磊群を拔き、明敏衆を排し、矯々たる反抗、憤々たる不平、爆然と破裂し、波爛萬疊の生涯眞に維新當時奇傑を是江藤新平となす。
今鹿島君の痛快なる筆に依り眞相活躍血湧き肉躍る。

大隈伯序
福田琴月君著

世界偉人傳

上製美本 正價壹圓廿錢
四版 郵稅十貳錢

今歷史を繙くや遙々三千歲國家の興亡する波の一去一來する如く而も其の裡に偉人傑士の存ぜざるはなし本書は是の間に於ける偉人の面影を傳せるものにして實に世界の國家興亡史を讀むの感をなさしむ

實業之日本社發行圖書總目錄

◉史傳地理

農法學博士新渡戸稻造君著序
山方香峯君著

◉十大德教家傳
大版 上製美本 正價貳圓 書留小包十八錢

若宮卯之助君著

◉米國史
大版上製金文字入 正價壹圓七十錢 郵稅拾貳錢

ルーズヴルト原著法學士
遠山熙君山崎梅處君共譯

◉偉人クロムウエル
大版上製金文字入 正價壹圓 郵稅八錢

農法學博士新渡戸稻造君序
山方香峯君著

◉新武士道
大版 金文字入 正價壹圓 郵稅八錢

岡三慶翁著

◉新編武士道實話
上製金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

山方香峯君著

◉一國一人近世人傑傳
上製金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

山方香峯君著

◉世界人豪の片影
中版全一册 正價五拾錢 郵稅六錢

報知新聞記者佐瀨醉楳君著

◉當代の傑物
上製金文字入 正價六拾錢 郵稅八錢

實業之日本記者石井白露君著

◉最近米國成功十傑
全一册美本 正價五拾錢 郵稅六錢

福田琴月君著
●偉人の少年時代　上製金文字入　正價六拾錢　郵稅八錢

中野觀象君著
●最新外國商業地理　大版上製金文字入　正價五拾五錢　郵稅八錢

宮田千年君著
●世界商業史綱　大版上製金文字入　正價六拾錢　郵稅八錢

大隈伯序　福田琴月君新著
●世界偉人傳　大版全一冊　正價壹圓廿錢　郵稅拾貳錢

加藤政之助君著
●滿洲處分　大版全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

長谷川宇太治君著
●渡清案內　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

市吉徹夫君著
●地理と商品　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

大隈伯序三宅有賀田中館博士追懷文　薄田斬雲君著
●天下の記者　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

鈴木光次郎君著
●現代百家名流奇談　中版全一冊　正價廿錢　郵稅四錢

桑谷克堂君著
●成功秘訣富豪の面影　全一冊美本　正價五拾錢　郵稅六錢

實業之日本社編纂
●日本富豪の家風　全一冊美本　正價五拾錢　郵稅六錢

京都大學圖書館員　佐竹義繼君編
●幕末勤王烈士手翰抄　上製金文字入　正價壹圓五拾錢　郵稅拾貳錢

前カラチン女學堂教頭　一宮操子女史著
●蒙古土產　大版上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

●經濟產業書類

專修學校法政大學教師法學士　工藤重義君著
●經濟財政要義　大版上製金文字入　正價壹圓廿錢　郵稅拾貳錢

米國エグルトン氏著　蘆川忠雄君譯
●處世經濟法　中版全一冊　正價廿錢　郵稅四錢

米國イリー博士　クヰックワー博士共著
●經濟學提要　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

米國ゼンクス博士原著　別府丑太郎君譯述
●產業合同論　大版上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

商業學士　小林行昌君　土屋長吉君共著
●中等經濟學　大版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

土屋長吉君著
●應用經濟學　大版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

淺井藤侃君著
●最新農業經營　大版全一冊　正價四拾五錢　郵稅六錢

宮入良右衞門君著
●經濟的育蠶法　大版全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

カーネギー翁著　伊藤重次郎君譯
●富の福音　洋裝全一冊　正價四十錢　郵稅六錢

川上善兵衛君著
●葡萄提要　大版上製金文字入　正價壹圓八拾錢　郵稅拾貳錢

法學博士天野爲之君新著　菊版上製金文字入　正價貳圓五拾錢　郵稅小包十八錢
●經濟策論

◉衛生書類

醫師武藤喜作君著
●家庭應急手當法　中版全一册　正價四拾錢　郵稅六錢

報知新聞記者中村木公君著　中版金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢
●名家長壽實歷談

東京朝日新聞記者杉村縱橫君著
●肺病全快談　中版全一册　正價五拾錢　郵稅六錢

農學博士玉利喜造君著
●冷水浴の實驗と學理　中版全一册　正價廿五錢　郵稅四錢

萬朝報記者　中島氣峰君著
●禁酒の五年間　大版全一册　正價廿五錢　郵稅四錢

醫學博士加藤照麿君校閲　西谷龍顯君譯著
●最新育兒法　全一册美本　正價七拾錢　郵稅六錢

英國ノールソン著海獄生譯
●思想健全法　中版全一册　正價廿錢　郵稅四錢

蘆川忠雄君著
●心機轉換法　中版全一册　正價廿五錢　郵稅四錢

英國グランヴヰル博士著　海獄生譯
●簡易安眠法　中版全一册　正價廿五錢　郵稅四錢

英國グランヴヰル博士著　海獄生譯
●神經健全法　中版全一册　正價廿五錢　郵稅四錢

蘆川忠雄君著
●頭腦明快法　中版全一册　正價廿五錢　郵稅四錢

英國グランヴヰル博士著　蘆川忠雄君著
●最新記憶法　中版全一册　正價廿五錢　郵稅四錢

醫學士樫田十次郎君著
●衛生十二月　袖珍　正價廿錢　郵稅四錢

◉商業實務書類

米國ウオルター、デー、ムツデイー著堀内新泉君譯
●店頭讀本新販賣術　大版全一册　正價五拾錢　郵稅八錢

金澤商業學校長中野觀象君編　島山觀成君書
●實用商業文練習帖　和本習字手習　正價六拾錢　郵稅四錢

土屋長吉君著
●商戰必勝　中版全一册　正價廿五錢　郵稅六錢

土屋長吉君著
●商工執務法　大版全一册　正價五拾錢　郵稅六錢

カーネギー翁著　伊藤重次郎君譯
●實業の鍵　大版全一册　正價廿五錢　郵稅六錢

前金澤商業學校長　永野耕造君著
●商業修身訓　上中下三冊　正價四拾五錢　郵稅八錢

中野觀象君著
●實用商業書信文範　大版全一冊　正價四拾錢　郵稅八錢

商業學士　小林行昌君著
●英文商用文敎科書　大版上製金文字入　正價四拾五錢　郵稅六錢

カーネギー翁著　小池靖一君譯述　附錄　カ翁評傳
●實業の帝國　正價卅五錢　郵稅六錢

カーネギー翁著　伊藤重次郎君譯
●富の福音　洋裝全一冊　正價四拾錢　郵稅八錢

男爵前島密序　澤村菊池兩君共著
●戰捷國民實業指針　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

藤岡秀太郎君著
●商品と其荷造法　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

惣崎貞夫君著
●生命保險提要　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

市吉徹夫君著
●銀行と社會　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

土屋長吉君著
●商品と商業經營　中版全一冊　正價卅五錢　郵稅六錢

土屋　吉君著
●最新販賣術　中版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

土屋長吉君著
●商業繁榮策　中版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

土屋長吉君著
●最新商業要綱　上製　正價八拾五錢　郵稅七拾錢　並製各八錢

土屋長吉君著
●簡易商業學　上下二冊　正價四拾錢　郵稅八錢

中野觀象君著
●最新外國商業地理　大版上製金文字入　正價五拾五錢　郵稅八錢

宮田千年君著
●世界商業史　大版上製金文字入　正價六拾錢　郵稅八錢

男爵後藤新平君序　西村正確君著
●最新事務法　袖珍上製金文字入　正價六拾錢　郵稅六錢

商業學士小林行昌君　下平精一君共著
●英國商業實務　大版上製金文字入　正價壹圓廿錢　郵稅小包十二錢

實業之日本記者　都倉義一君著
●最新式記帳法　大版全一冊　正價七拾錢　郵稅八錢

中野觀象君著
●橫帳改良單式簿記　大版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

千代田生命保險會社會計課長與石丑太郎君著
●利廻早見表　大版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

近江屋質店員　奥村喜一郎君著
●新撰實業讀本　和裝全一冊美本　正價廿五錢　郵稅四錢

五十嵐次郎君著
●最新商業算術　上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

西岡英太郎君著
●商賈と勘定　中版全一冊　正價四拾錢　郵稅八錢

中野觀象君　高間昭君共著
●新案商業書信活法　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

竹内正太郎君著
●商業簿記獨習書　全一冊　正價七拾錢　郵稅八錢　美本

竹内正太郎君　村塚玄君共著
●最新商業範記　大版全一冊　正價廿錢　郵稅六錢

市吉徹夫君著
●地理と商品　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

朝鮮日日新聞社著
●百圓の渡韓成功法　中版全一冊　正價三十五錢　郵稅四錢

桑谷克堂君著
●成功秘訣富豪の面影　全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢　美本

篠田鑛造君著
●通俗小僧學問　袖珍總振假名　正價貳拾錢　郵稅四錢

西岡英夫君著
●立身の繁昌　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

在米、柿西藤一郎君著
●米國の商店　中版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

●修養書類

蘆川忠雄君著
●品性の勢力　大版金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

米國前大統領ルーズヴェルト氏原著
山崎梅處君譯述
●ルーズヴェルト全集　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

蘆川忠雄君著
●自助の精神　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

波多野烏峯君著
●新自助論　中版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

岡三慶君著
●新編武士道實話　上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

波多野烏峯君著
●健全なる常識　大版製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

蘆川忠雄君著
●沈着心修養　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

蘆川忠雄君著
●交際術修養　大版全一冊　正價壹圓　郵稅八錢

樋口配天君著
●默想　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

蘆川忠雄君著
●日常の言語　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

高須梅溪君著
●人格の鍛錬　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

高須梅溪君著
●偉人修養の徑路　袖珍上製金文字入　正價五拾錢　郵稅六錢

雨宮敬次郎君著
●奮鬪吐血錄　中版全一冊　正價六十錢　郵稅六錢

蘆川忠雄君著
●意志の鍛練　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

蘆川忠雄君著
●讀心術修養　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

蘆川忠雄君著　山崎清風君共著
●克己心の修養　大版全一冊　正價壹圓　郵稅八錢

江口岳東君著
●人格の光輝　大版全一冊　正價六十錢　郵稅八錢

獨逸マイアー氏著　波多野烏峯君著
●樂天の勝利　大版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

實業之日本記者　岳淵生著　（公開狀）
●新時代の青年　中版全一冊　正價四十錢　郵稅六錢

文學博士井上哲次郎君校閲　植村道次郎君著
●教育勅語要義　大版頗美本　正價壹五錢　郵稅四錢

米國マーデン翁著　波多野烏峯君譯述
●快活なる精心　中版全一冊　正價廿錢　郵稅四錢

法學博士和田垣謙三君序　蘆川忠雄君著
●人生の慰安　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

島田三郎君序　蘆川忠雄君著
●常識の修養　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

男爵澁澤榮一君序　蘆川忠雄君著
●實務才幹訓練　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

男爵前島密君序　蘆川忠雄君著
●人生の奮鬪　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

英國男爵エーヴベリ卿　ラボック著　正木照藏君譯
●人生の妙味　大版上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

伯爵大隈重信君序　蘆川忠雄君著
●樂天の生活　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

實業之日本記者岳淵生著
●品性の光輝　中版全一冊　正價卅五錢　郵稅六錢

蘆川忠雄君著
●心機轉換法　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

米國トマス、ラーチング氏著　堀內新泉譯述
●不平慰安法　大版全一冊　正價卅五錢　郵稅六錢

蘆川忠雄君著
●觀察力修養　中版全一冊　正價卅五錢　郵稅四錢

英國フリエス氏著　蘆川忠雄君譯述
●雄健の氣象　中版全一冊　正價四拾錢　郵稅四錢

堀內新泉君著
●自彊術　中版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

蘆川忠雄君著
●決斷力修養　中版全一冊　正價卅五錢　郵稅四錢

實業之日本臨時增刊
●勇者の世界　大版全一冊　正價廿貳錢　郵稅貳錢

實業之日本臨時增刊
●人格の修養　大版全一冊　正價廿貳錢　郵稅壹錢五厘

蘆川忠雄君著
●人格の鍛錬　中版全一冊　正價三十五錢　郵稅四錢

佛國大問屋主人ビエール著　前田越嶺君譯述
●成功實例商才修養の實驗　中版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

野田叱電君著
●青年立身訓　中版全一冊　正價卅錢　郵稅四錢

蘆川忠雄君著
●失敗の活用　中版全一冊　正價三拾五錢　郵稅四錢

高橋男爵序　波多野烏峯君著
●實業青年自尊の修養　大版全一冊　正價八拾錢　郵稅八錢

藤原楚水君編
●先哲遺訓座右銘全集　中版全一冊　正價壹圓　郵稅八錢

海老名彈正君著
●新國民の修養　上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

ルーズヴェルト氏著
山崎梅處君　松宮春一郎君共著
●奮鬪の教訓　大版全一冊　正價壹圓貳拾錢　郵稅拾貳錢

醫法學博士　新渡戸稻造君著
●修養　大版上製箱入　正價壹圓七十錢　郵稅十貳錢

慶應義塾々長　鎌田榮吉君著
●獨立自尊　大版上製箱入　正價壹圓七十錢　郵稅十貳錢

◉語學數學書類

高橋五郎君著
●英語正確使用法　上製金文字入　正價六拾錢　郵稅六錢

上海同文書院校友谷原孝太郎君著
●日清英會話　上製紙函入　正價壹圓　郵稅八錢

高橋五郎君著
●英語熟達法　中版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

高橋五郎君著
●英語句讀法　中版全一冊　正價六拾錢　郵稅六錢

米國理學士大木新三君　鈴木精一君共著
●新式代數難問詳解　上製金文字入　正價七拾錢　郵稅六錢

渡邊德兵衛君　小里運八君共著
●實用珠算教科書　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

高間、上田、中宮三君共著
●最新珠算全書　大版全一冊　正價卅五錢　郵稅六錢

五十嵐次郎君著
●最新商業算術　上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

◉婦人家庭書類

京都師範學校教諭　木內菊次郎君著
●花ひすひ　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

梅田矯菓君著
●和洋折衷新案菓子製法　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

報知新聞記者　中村木公君編
●名流實話婦人のかがみ　大版上製金文字入　正價七拾錢　郵稅八錢

醫師　武藤喜作君著
●家庭應急手當法　中版全一冊　正價四十錢　郵稅四錢

實踐女學校講師　長谷川岩吉君述
●刺繍獨習法　大版全一冊　正價卅五錢　郵稅六錢

京都師範學校教諭　木內菊次郎君著
●折紙と圖畫　大版全一冊　正價卅五錢　郵稅六錢

山方香峯君著
●日常生活衣食住　大版上製金文字入　正價壹圓廿錢　郵稅小包十二錢

梅田矯菓君著
●家庭菓子製法　全一冊美本　正價五拾錢　郵稅六錢

村井弦齋君著
●婦人の日常生活法　特別上製壹圓廿錢郵稅拾貳錢　並製美本壹圓郵稅八錢

石塚月亭君編　第一編第二編第三編三冊
●弦齋夫人の料理　正價各六拾錢　郵稅八錢

東京職工學校教諭　本間鶴治君著
●通俗家庭理科　大版全一冊　正價七拾錢　郵稅八錢

西谷龍顯君著
●太郎の質問に母の答　中版全一冊　正價廿錢　郵稅四錢

堀内新泉君著
●娘に與へたる母の書簡　前編四拾錢郵稅六錢　後編五拾錢郵稅八錢

報知新聞記者　天野誠齋君編
●家庭日常の實驗　大版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

米國女記者ペエン氏著　實業之日本社飜譯
●女子處生訓　三百五十餘頁　正價卅五錢　郵稅六錢

赤堀吉松、赤堀峯吉、赤堀菊子三君共著
●日本料理法　大版一冊美本　正價七拾錢　郵稅八錢

婦人世界臨時增刊
●衣裳かがみ　菊版全一冊　正價拾五錢　郵稅壹錢五厘

西谷龍顯君著
●婦人の重寶　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

加藤醫學博士校閲　西谷龍顯君譯述
●最新育兒法　全一冊美本　正價七拾錢　郵稅六錢

中島文學博士序　長野縣高等女學校長　波多野市松君著
●子供の研究　大版上製金文字入　正價七拾錢　郵稅八錢

三輪田眞佐子女史序　阿部長咲君著
●健全なる家庭　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

實業之日本社編纂
●日本富豪の家風　全一冊美本　正價五拾錢　郵稅六錢

日本石油會社會計課長　竹田常治君著
●實用會計簿記　大版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

婦人世界臨時增刊
●食物かがみ　菊版全一冊　正價拾五錢　郵稅壹錢五厘

婦人世界臨時增刊
●婦人の慰藉　菊版全一冊　正價拾五錢　郵稅壹錢五厘

婦人世界臨時增刊
●樂しき婦人　菊版全一冊　正價拾五錢　郵稅壹錢五厘

木内菊次郎君著
●圖畫應用紙細工　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

白井悅子女史著
●家庭實用衛生料理法　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

松葉靜和女史著
●造花實習　大版全一冊　正價六拾錢　郵稅八錢

下田歌子女史著
●婦人常識の養成　大版全一冊　正價壹圓五拾錢　郵稅八錢

秤石齋文雅著
●諸流盆石指南　大版全一冊　正價六拾錢　郵稅八錢

讀賣新聞家庭記者　中村秋人君著
●兒童教育涙と鞭　中版全一冊　正價參拾五錢　郵稅四錢

天野誠齋君著
●家事實習法　大版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

米國婦人ウキルコックス女史原著
三津木春影君譯
●婦人の新修養　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

村井弦齋君著
●婦人及男子の參考　大版全一冊　正價貳圓　郵稅十八錢

木內菊次郎君著
●最新手工科教授法　大版全一冊　正價壹圓五拾錢　郵稅六錢

文學士　堀田相爾君著
●家庭教育の仕方　中版全一冊　正價壹圓　郵稅四錢

井上氏子女史著
●烈婦美譚　大和撫子　大版全一冊　正價四十五錢　郵稅六錢

村井弦齋君著
●少女讀本　大版全一冊　正價壹圓　郵稅八錢

讀賣新聞家庭記者　中村秋人著
●幼兒保育情と躾　中版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

三津木春影君著
●皇帝謁見少年旅行　中版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

木村勉君編
●古流挿花の栞　大版頗美本　正價壹圓五十錢　小包料十二錢

東草水君著
●夏やすみ　中版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

下田歌子女史著
●婦人禮法　大版上製　正價壹圓五拾錢　郵稅拾貳錢

渡邊白水君著
●少女美談　上製七拾五錢　並製六拾錢　郵稅各八錢

村田天籟君著
●婦人の心理　大版全一冊　正價六拾錢　郵稅八錢

富益、鈴木、田中君合著
●實用園藝全書　大版上製箱入　正價貳圓　郵稅十二錢

●處世書類

前田越嶺君著
●生存競爭法　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

蘆川忠雄君著
●最良の機會　中版全一冊　正價壹圓五錢　郵稅四錢

園田孝吉君序　波多野烏峯君著
●紳士と社交　上製金文字入　正價七拾錢　郵稅八錢

ジョンソン氏著　山崎梅處君譯述
●向上的處世法　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

蘆川忠雄君著
●日常の言語　中版全一冊　正價壹圓五錢　郵稅四錢

ミラー博士著　波多野烏峯君譯述
●光榮ある生涯　中版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

マシュース博士著　江口岳東君譯
●處世術修養　大版全一冊　正價壹圓貳拾錢　郵稅拾貳錢

蘆川忠雄君著
●樂天の生活　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

實業之日本臨時增刊
●新時代の奮鬪　大版全一冊　正價貳圓　郵稅貳錢

實業之日本臨時增刊
●樂天的處世法　大版全一冊　正價廿貳錢　郵稅貳錢

實業之日本社編纂
●成功座右銘　柚珍美本　正價拾六錢　郵稅四錢

男爵辻新次君序　波多野烏峯君著
●逆境離脫策　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

米國エグストン氏著　蘆川忠雄君譯
●處世經濟法　中版全一冊　正價廿錢　郵稅四錢

波多野烏峯君譯著
●處世の標準　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

英國リッチー氏著　山崎梅處君譯
●富豪實驗教訓　大版全一冊　正價六拾錢　郵稅八錢

實業之日本臨時增刊
●同情の勢力　大版全一冊　正價廿貳錢　郵稅貳錢

波多野烏峰君著
●社會側面觀　上製金文字入　正價七拾錢　郵稅八錢

實業之日本社編纂
●處世座右訓　柚珍美本　正價貳拾錢　郵稅貳錢

實業之日本社編纂
●成功錦囊　中版全一冊　正價廿錢　郵稅六錢

蘆川忠雄君著
●應對談話法　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

ゼローム氏著　波多野烏峯君譯
●表裏百面人生の眞相　中版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

米國富豪グラハム翁書信　實業之日本社飜譯
●成功者の信書處世教訓　中版全一冊　正價四拾錢　郵稅八錢

米國ジョン、グラハム翁著（右の原著）
●英文處世教訓　中版全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

實業之日本臨時增刊
●處世の金科玉條　大版全一冊　正價廿貳錢　郵稅貳錢

何原智皎君著
●精髓處世經典　袖珍上製金文字入　正價三拾六錢　郵稅四錢

◉雜書類

大勳位伊藤公題字大隈伯爵自序江森泰吉君編
●大隈伯百話　大版上製金文字入　正價貳圓八拾錢　書留小包十八錢

米國エール大學教授哲學博士　朝河貫一君著
●日本の禍機　大版全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

實業之日本記者　嬌溢生著
●獨笑珍話　袖珍美本　正價四拾錢　郵稅六錢

伯爵大隈重信君序　島田三郎君序　三宅磐君著
●都市の研究　上製金文字入　正價七拾錢　郵稅八錢

山崎梅處君譯述
●ルーズヴエルト全集　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

英國リチャードソン氏著　實業之日本社譯述
●最新讀書法　中版全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

山方香峰君著
●讀書便覽　三六版美本　正價卅錢　郵稅四錢

實業之日本社編
●東西名士發奮の動機　上製金文字入　正價壹圓拾錢　郵稅八錢

佐藤青吟君著
●學生の前途　中版全一冊　正價卅五錢　郵稅六錢

大隈伯序　永井柳太郎君著
●人氣質思ひ出の記　中版全一冊　正價八十錢　郵稅八錢

伯爵大隈重信君、島田三郎君序、三宅磐君著
●都市の研究　上製金文字　正價七拾錢　郵税八錢

高須梅溪君著
●滑稽趣味の研究　中版全一册　正價六十錢　郵税六錢

文學士　藤田篤君著
●實用文字便覽　袖珍上製　正價五十五錢　郵税六錢

實業之日本社編
●優等學生勉强法　袖珍並製　正價貳拾錢　郵税四錢

加治木常樹君編
●西鄕南洲書簡集　大版上製　正價九十錢　郵税八錢

●最新刊書籍

木村勉君篇
●古流挿花の栞　大版上製頗美本　正價壹圓五拾錢　郵税拾貳錢

三津木春影君譯
●皇帝謁見少年旅行　中版全一册　正價四十錢　郵税六錢

柿西藤一郎君著
●米國の商店　中版全一册　正價五拾錢　郵税六錢

東草水君著
●夏やすみ　中版全一册　正價四十錢　郵税六錢

下田歌子女史著
●婦人禮法　大版上製　正價壹圓五拾錢　郵税拾貳錢

村田天籟君著
●婦人の心理　大版並製　正價六拾錢　郵税八錢

渡邊白水君著
●少女美談　上製並製　七拾五錢　郵税六拾錢　各八錢

島田元麿、東草水合作
●青い鳥　中版美本　正價卅錢　郵税四錢

星野水裏君著
●口語詩新體詩濱千鳥　中版美本　正價廿五錢　郵税四錢

農法學博士　新渡戸稻造君著
●修養　大版上製箱入　正價壹圓七十錢　郵税十二錢

慶應義塾々長　鎌田榮吉君著
●獨立自尊　大版上製箱入　正價壹圓七十錢　郵税十二錢

富益、鈴木、田中君合著
●實用園藝全書　大版上製箱入　正價貳圓　郵税拾貳錢

讀賣新聞記者　松川次郎君著
●南米と南洋　中版美本　正價五十錢　郵税六錢

手紙雜誌主幹　桑田春風君著
●男女修養家庭書簡　中版美本　正價七十錢　郵税八錢

文學士　岩佐重一君著
●烈婦の面影　大版上製　正價七十錢　郵税八錢

高須梅溪君著
●新時代普通文　中版全一册　正價五十錢　郵税六錢

新渡戸、坪内、和田垣三博士監修
●英和俗語熟語故事大辭典　上製大版脊皮美本　正價四圓五十錢　小包送料十八錢

報知新聞記者鹿島櫻堂君著
●江藤新平　中版全一册　正價四十錢　郵税六錢

篠原祿次君著
●地方青年團の組織及事業　中版全一册　正價五十錢　郵税六錢

土屋長吉君著
●實踐會計整理法　大版正價五十錢　全一冊郵稅六錢

嬌溢生著
●名士奇聞錄　三五版正價五十錢　頗美本郵稅六錢

文學博士　谷本富君著
●女子教育　大版正價壹圓　上製郵稅八錢

日本女子大學校長　成瀨仁藏君著
●進歩と教育　大版正價七拾錢　上製郵稅十錢

高濱虛子著
●小說朝鮮　目下印刷中

井上民子女史著
●山田流琴歌詳解　目下印刷中

藤波芙蓉君著
●合せ鏡　小版正價卅五錢　頗美本郵稅六錢

農法學博士　新渡戸稻造君著
●世渡の道　目下印刷中

兒玉花外君著
●英雄史詩日本男兒　小版正價四十錢　美本郵稅六錢

京都大學助教授河上肇君著
●經濟と人生　大版正價壹圓　上製郵稅八錢

日本少年主筆瀧澤素水君著
●冒險小說怪洞の奇蹟　大版正價卅五錢　全一冊郵稅六錢

品川卯一郎君著
●最新賣出し法　目下印刷中

實業之日本社編
●英語熟達日記　目下印刷中

文法學博士男爵加藤弘之君著
●自然と倫理　目下印刷中

實業之日本社發行　五大雜誌

▲實業之日本　▲一冊拾壹錢郵稅一錢▲每月二回一日十五日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共壹圓五十五錢▲一年分增刊共三圓

▲婦人世界　▲一冊拾五錢郵稅一錢五厘▲每月一回一日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共壹圓五錢▲一年分增刊共貳圓五錢

▲日本少年　▲一冊拾錢郵稅一錢▲每月一回一日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十錢▲一年分同壹圓三十五錢

▲少女の友　▲一冊拾錢郵稅一錢▲每月一回一日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十錢▲一年分同壹圓三十五錢

▲幼年の友　▲一冊拾錢郵稅五厘▲每月一回一日發行▲六冊郵稅共五十八錢▲十二冊同壹圓拾錢